

PROLOGUE

一つの大陸があつた。

居住者は魔族ばかり。人間や妖精からは「暗黒大陸」と呼ばれ、恐れられていた。とある有力魔族が、この大陸を完全に支配し、ヴィスガルド魔王国を建国した。こうして、初代魔王が誕生した。

人類や妖精族が住む大陸への一大侵攻を開始したのだ。

だが、世界征服という大願も虚しく、彼は戦時に大往生を遂げた。享年四十九。魔王といえども、病には勝てなかつた。

初代魔王は七十二名もの子を儲けていた。

血で血を洗う王位争奪戦が繰り返された結果、とある王子が生き残つた。宮廷のされ一人として、その結果は予想していなかつた。



レベル0の魔王様 異世界で冒険者を始めます

史上最強の新人が誕生しました

先行試読版

実に、最下位からの成り上がりだつた。

——二代目魔王の名は、イシュヴァルト・アースレイ。閑達な性格で知られ、周囲からは「イシュト」と呼ばれることを好んだという。即位式において、彼は早速、己の能力を見せつけた。景気づけに、夜天に煙々と輝く満月を碎いてみせたのだ。暗黒属性の、超長距離攻撃魔法であつた。

この世界の月は三つあり、それまでは「三連月」と呼ばれていた。その一つをイシュトが碎いたことで、以後は「双子月」と呼ばれるようになった。

即位式もそこそこに、新魔王イシュトは公務に就いた。亡父が始めた戦争は、いまなお続いていたのである。最初のうち、彼が立案した作戦の数々は大当たりし、魔王軍は怒濤の進撃を果たすことになる。だが、人類側も愚かではなかつた。以前は同族同士で醜い争いを繰り返していたのだが、いざ「魔王軍迫る!」の急報が響きわたるや、一致団結を果たしたのだ。戦況は膠着した——。

だが、人種側も愚かではなかつた。以前は同族同士で醜い争いを繰り返していたのだが、いざ「魔王軍迫る!」の急報が響きわたるや、一致団結を果たしたのだ。戦況は膠着した——。

即位式もそこそこに、新魔王イシュトは公務に就いた。

そんな折、とある「勇者パーティ」が魔王城に潜入した。

彼らは、全三十三層に及ぶ魔王城を地道に攻略し、ついには最上層に到達。かくして、魔王と勇者による一大決戦が始まつた。

ヒューマン、エルフ、ドワーフ、そして伝説級の魔法使い……世界各地から集められた勇者たちは手強く、さすがの魔王イシュトも追いつかれてしまふ。『光栄に思うがいい。この姿を見せるのは、貴様らが初めてだ』

イシュトは嚴かに宣言した。

見る見るうちに第二形態へと移行する。全身が巨大化し、背中から漆黒の翼^{じっこく}が生えた。下半身は人型から竜型へと変異を遂げた。あたかも、巨人の上半身と大型竜の下半身を接合したかのような、禍々しい姿が現れた。

常人ならば、じろりと睨まれただけで魂を抜かれてしまうだろう。

身のほど知らずな勇者どもを一網打尽にすべく、魔王イシュトは反撃を開始した。

無数の触手による、連続攻撃にして全体攻撃。暗黒属性を主体とする攻撃魔法。あらゆる状態異常を付加する眼術。

あらゆる支援魔法の効果をネチネチと解除する特殊攻撃。一定時間が経過すると、問答無用で相手を殺す呪術。

さらには、悪鬼の群れを大量に召喚し、鉄壁の布陣を構えた。それでも勇者たちは倒れなかつた。

伝説級の武器や最上位の魔法、そして華麗なチームワークで対抗したのだ。まさしく疾風怒濤の攻防が繰り広げられた。

いつしか、イシュトが召喚した悪鬼たちは全滅していた……。

ここに至り、魔王イシュトは心を決める。

いまこそ「奥の手」を使うときだと——。

それは、まだ一度も試したことのない最終奥義。

彼自身にも、なにが起ころのかはわからない。

もしかすると、この暗黒大陸を丸ごと消滅させてしまふかもしれない。

それでも、やらねばならぬ。

魔王の辞書に「敗北」の文字はないのだ。

「忘まわしき勇者どもよ、刮目して見よ——」

いよいよ最終奥義を使うべく、イシュトが「うおおおおおおっ！」と気力を振りしぼつていた矢先のことだった。

ずっと後衛で待機していた魔法使いが、ついに動いたのだ。

イシュトの視界が、真っ白に染まる。

そして、壯絶な爆音が響きわたつた。

とてつもない衝撃が、イシュトの全身に襲いかかる。第一形態の巨體でさえも、枯れ葉のごとく吹き飛ばされてしまう。

「バカな……こんなところで……俺は死ぬのか…………」

そのつぶやきを最後に、イシュトの意識は闇に閉ざされた。

——時に、暗黒暦五二八年・幽冥の月・第十二日。

第二代魔王イシュヴァルト・アースレイは、勇者たちに討伐された。享年二十九。

在位期間は六六年。

魔王イシュトの物語は、そこで幕を閉じるはずであつた。だが——。

QUEST 1 「一敗地に塗れたからといって、それがどうした」

1

今夜の満月は、不気味なほどに紅い。

ここは、大陸隨一の大國——レハール王国の最北部。

普段は濃紫色を帯びた荒野だが、今夜は深紅の月が煌々と輝いているおかげで、大地は赤紫に染まっていた。

そんな地域に、巨大な建築物があつた。

——バルディオス神殿塔。

石造りのかなり古い建築物だ。

全十三層で、内部は迷宮のごとく入り組んでいる。

その最上層の大広間で、壮絶な死闘が繰り広げられていた。

挑むのは、王都の名たる冒險者たちで構成された特別遠征部隊。総勢百名。

十日ほどを費やして、彼らは最上層にたどり着いたのだが——。
このダンジョンに君臨するドラゴン——「暴虐の怒石竜」の二つ名を持つベルグントの強さは、彼らを圧倒した。

「くそっ！ なんて野郎だ！」

「もう逃げるしか……」

「早く応急処置を！ このままじゃ死んじゃう！」

最上層フロアは、阿鼻叫喚の巷あびきよかんちまたと化していた。

——「暴虐の怒石竜」。

見た目はトカゲに似ているが、地属性に特化した竜族——アース・ドラゴンの最上位種だ。厄介なことに、攻撃魔法は効かないことが、すでに判明している。

戦闘開始後、黒魔道士が唱えた魔法は、ことごとく無効化された。

となれば、物理攻撃で仕留めるしかないのだが、縦横無尽に暴れまわるドラゴンに接近するのは、自殺行為に等しい。

しかも、上級モンスターに指定されているバジリスクを大量に従えており、隊員たちは次第に分断されていった。事前に何度も練習していたフォーメーションも、なんら役には立たなかつた。

負傷者が続出しているため、神官や白魔道士は引つきりなしに回復魔法を唱えている。ボー

ションの使用回数も増える一方であり、物資が底を突くのも時間の問題だった。いまや後方の一帯は、怪我人たちの避難所と化している。

それでも、なんとか踏み留まっている少女が、ここに一人——。

「わたしが食い止めてみせる！ 一人も死なせはしない！」

純白の騎士の乙女——アイリスは、白銀の軌跡を描きつつ跳躍した。

もはや残り少ない戦士たちが、バジリスクの群れを引きつけていた。その隙に、アイリスだけでもベルグントの懷いだこに潜りこみ、短期決戦に持ちこむ作戦だった。

全身を硬い鱗うろこに覆われたベルグントの弱点は限られている。その一つが、柔らかい腹部だ。あそこなら鱗に覆われていない。

アイリスの得物は聖剣ミストルティン。両手持ちの大剣だ。アイリス自身にとって、そして特別遠征部隊にとつても、最後の切り札といえた。

だが——ベルグントが放つた火炎の威力は、アイリスの予想をはるかに超えていた。まるで、目の前で火山が噴火したのかと思ったほどだ。

「——！」

回避したつもりだった。実際、直撃こそ免まぬがれたが、アイリスの身体は軽々と宙を舞つていた。ブレスの余波を浴びてしまつたのだ。

た。

そして、落下。硬い石畳に全身を打ちつけられてしまい、息が詰まつた。

「くっ……余波だけで、この威力……!?」

ダメだ。身体が思うように動かない。からうじて剣の柄は握りしめているが、しばらくは立ちあがれそうになかった。

胸部をはじめ、急所を覆っていた防具の多くが吹き飛ばされている。もはや半裸に近い姿だつた。傷口がズキズキと痛む。

「グオオオオオオオオオオオオオオオンツ……！」

と、ベルグントが凱歌がいかのような雄叫おなげびをあげた。

その口からは、いましも第二のブレスが吐きだされようとしていた。

万事休す。

せめて騎士として、誇り高き死を——。

次の瞬間、強烈な閃光せんこうが視界を真っ白に染めたかと思うと、爆発音ばくはつおんが轟とどろいた。

まぶしさのあまり、アイリスは目を開じた。

「……まだ生きてる？」

やがて、アイリスは目蓋を開いた。

頭はがんがんするし、特に耳鳴りがひどい。あの爆発音のせいで、一時的に聴覚が失われてしまつたらしい。

ベルゲントが第二のプレスを吐いたのかと思ったが、そうではないようだ。

一体、目の前でなにが起きたというのか――。

大地に這いつくばつたまま、素早く周囲を観察する。そして、驚愕した。

ドーム状の天井部が、完膚なきまでに破壊されているのだ。

大量の瓦礫が、フロアの中央部分に散在していた。幸いにも、後退を余儀なくされていた遠

征部隊は、巻きこまれずにすんだようだ。

アイリス自身、先ほどベルゲントに吹き飛ばされたおかげで、瓦礫の下敷きにならなかつたのは、怪我の功名といえた。

一方、アイリスたちを散々に苦しめたバジリスクの群れは、目の前の怪現象におどろいてしまつたらしく、一目散に逃げだした。望外の幸運だつた。

ただし、ベルゲントだけは格が違つた。

この異常事態を前にしても、怖じ氣づいた様子は皆無である。その場でじつと身構えながら、周囲を警戒している。もはやアイリスを見ていはいなかつた。

「なにが起こつたというの……？」

頭上から冷たい夜気が入りこんできて、アイリスの肌を撫でた。

夜天の中央では、紅い月が真円を描いている。

そのとき、アイリスは気がついた。

ベルゲントの前方に、見慣れぬ少年の姿があつた。

「あの男の子……だれ？」

2

少年は、まるで光の洪流のなかから生まれたかのように、そこに立つていた。黒髪に深紅の瞳。目つきは鋭い。

細身の身体は、マントのような布きれで覆われているだけだ。

「……どこだ、ここは？」

と、少年はふしげそつにつぶやいた。

そのとたん、強烈な違和感を覚えて、自分の身体を丹念に調べ始める。

「なっ！ この身体は……なんだ!? 随分と縮んだものだな。これでは……まるで人間ではないか」

少年は記憶を探つてみた。
断片的な情報が、少しづつ甦つていく。

よみが
ヒューマン

頭はがんがんするし、特に耳鳴りがひどい。あの爆発音のせいで、一時的に聴覚が失われてしまつたらしい。

「そうだ……俺はイシュト。暗黒大陸を統べる魔王にして、すべての魔族の頭領——イシュトアルト・アースレイだ。たしか、あの猪口^{ちよく}才な勇者どもと戦つていたはずだが……」

「くつ……まだ記憶が混乱しているな。決定的な瞬間が思い出せんとは……」

「なんとか思い出せたのは、魔王城の最上層フロア——謁見^{えつけん}の間にて、勇者バー・ティードと対峙した場面までだ。どのような戦況だったのかは、残念ながら思い出せない。

ただし、自分が勇者たちに敗北したことだけは、察することができた。

そうでなければ、自分はいまも魔王城の最上層で、玉座に就いていたはずである。

「まずは現状を把握せんとな……」

とりあえず、周囲を観察してみた。

数百人は収容できるだろう、広大なフロアである。ただし、床には瓦礫が散在しているので、どういう目的の建物かは判然としない。

フロアのあちこちには、武装したヒューマンや亜人種が倒れている。壁際には負傷者たちが集まつていて、無事な者が治療に当たっていた。ただし、治療の手は止まつているようだった。だれもが呆然^{ぼうぜん}として、イシュトのほうを眺めているからだ。

「ふう……なんなのだ、この状況は?」

どうやら、ここは戦場の真^まっ只^{ただ}中らしいが――。

なにげなく天井を見上げると、夜空^{よそく}が広がつていて。

屋根は隕石^{いんせき}でも衝突したかのように、無惨^{むさん}にも破壊されていた。なるほど、周囲に散在している瓦礫の正体は、天井を構成していた石材らしい。

血のようない紅い満月が、煌々と輝いている。

たまに月が紅い色を帯びるのは、自然現象の一種である。魔王たる者、そのくらいの知識はある。無闇に恐れる必要はないと思つた。

問題なのは、月のサイズと個数だった。

「なんだ、あのバカでかい月は……しかも、たつた一つしか見えんぞ?」

混乱していた記憶が、少しづつ解きほぐされていく。

そう、イシュトが生まれ育った世界には、月が三つあった。もっとも、そのうちの一つは、イシュト自身が即位式の余興で破壊したのだつた……と思い出す。

なんにせよ、イシュトが見慣れた夜空とは、明らかに様相が異なる。

「もしや……ここは、『異世界』なのかな?」

「——ガルルルル……」

その可能性に思い当たつた直後、野獸のようない縦^{うな}り声がイシュトの耳朶^{じだ}を打つた。

「なんだ?」

イシュトは面倒くさそうに、背後を振りかえつた。

眼前に、巨大な影があつた。

「ほう。翼こそ見あたらんが、その堂々たる体験——ドラゴンの一種と見える」

イシュトは余裕たっぷりにつぶやいた。

鱗は漆黒で、てらてらと不気味に光っている。

とはいへ、イシュトが住んでいた世界においても、様々なドラゴンが棲息していたので、別

におどろきはしない。

その目が爛々と輝き、イシュトを睥睨^{へいげい}している。

どうやらイシュトを獲物と見なししたようだ。

「いや……ちょっと待て。この状況は、まずくないか？」

いまさらながら、イシュトは戦慄した。

魔王時代の彼ならば、この程度の竜種など、赤兎の手をひねるようにな倒せたはずだ。

だが、いまのイシュトときたら、見るからに面白いヒューマンにしか見えない。

「グオオオオオツー——ツ！」

と、ドラゴンが一声吼^ほえると、猛然と炎を噴いた。

瞬時にて、イシュトの全身が炎に包まれる。

——あ……死んだ？　うむ、これは死んだな……。

せつかく異世界で目覚め、新たな肉体を得た。

冷静に判断すれば、転生したと考えてい。

だが……せつかく期待を持たせておきながら、この仕打ち。

自分の運命を呪う間もなく、全身が焼け焦げて——。

「ん？　妙だな。痛くも痒くもないぞ？」

ふと、イシュトは気づいた。

あれほど猛火にさらされながらも、肌には火傷^{やけど}一つない。

ただし、身体を覆っていた布きれは焼けてしまつた。

見覚えのない布だが、これは記憶が混乱しているためだろう。

おそらく、魔王時代に着用していたマントの切れ端ではないだろうか。そうでなければ、ドラゴンの火焰にさらされた時点で炭化していたはずだ。いまだ原型を保ちつつ、イシュトの肌

を覆い隠しているのは、さすがといえた。

「——！」

と、炎を収束させたドラゴンが、奇妙な声をあげた。

ノーダメージのイシュトを見て、さすがに焦^{あせ}つたのだろう。怪訝^{けげん}そうに首をひねつていたが、

そこは野性の動物だけあって、疑問よりも怒りが優先したようだ。

まがまが
続けざま、ドラゴンは禍々しい眼光を放った。

互いの目が合つたとたん、イシュトの全身に異変が生じる。

「むつ？ これは……？」

見る見るうちに、皮膚のあちこちを石灰じみた物質が覆つていった。わずか数秒にして石化は完了し、あとには少年の石像がたたずむばかり。頭の先から爪先に至るまで、すっかり石化していた。

……ところが、ふしぎとイシュトの思考は途絶えていなかつた。むしろ冷静に状況を分析している。

——どうやら、あいつと目が合つたことで『石化』が発動したらしいな。それにしても、奇妙だ。石化といえば、ほとんど死と同義。意識は失うはずだが、こうして俺の思考はちゃんと持続している……とりあえず、抵抗してみるか。

すでに全身の感覚は失われていたが、イシュトは丹田のあたりに意識を集中させてみた。その後、ビシビシという亀裂音とともに、肌という肌を覆い尽くしていた石が碎け散つた。

見る見るうちに、身体感覚も回復した。

イシュトは自分の身体をたしかめた。無傷である。

「——？」

再び、ドラゴンが奇妙な声を発した。もはや及び腰である。ドラゴンの思考を翻訳するなら、「お前は『一体、なんなのだ!』」といったところだろうか。

「ふむ。見た目は貧弱なヒューマンだが、多少は魔王時代の能力を引き継いでいるらしい。自分の身体のことながら、よくわからんが……まあ、なんだ」

イシュトは、やりとした。

「次は、俺の番」というわけだ——

3

俯せに倒れていたアイリスは、信じがたい光景を目の当たりにした。

一体、戦闘中になにが起きたのか……まだ十五歳ながらも、数々の冒險を経験してきたアイリスでさえ、理解できない事態だった。

たしかなことは、まるで落雷のような怪現象とともに、詫めいた少年が出現したことだ。特別遠征部隊のメンバーに、あんな少年はいなかつた。そもそも、武器も防具も装備していない時点での外者に決まっている。

年齢は十八くらいだろうか。

黒髪で、ほつそりとした体型だ。

名前

一体、彼は何者なのか？

次の瞬間、アイリスは「逃げて！」と叫ぼうとした。

……遅かった。

ベルグントが容赦なく火^{フレス}焰を吐いたのだ。

瞬時に、少年の身体が猛火に包まれる——。

「そんな……！」

死者を一人も出さない——この特別遠征を始めるにあたり、アイリスは胸に誓った。だれかが危機に陥つたときは、全力で護るのだと。

だが……アイリスが見ている前で、少年は全身を焼かれてしまつた。

竜族の炎を真っ向から浴びたのだ。骨の欠片^{かけら}すら残らないだろう。

あまりに呆氣ない、一瞬の出来事だった。

アイリスは自分を責めた。

本調子であれば、彼を救うこともできたはずだ——。

次の瞬間、

「——!?」

アイリスは瞠^{どうもく}目した。

あの少年は、ドラゴンの炎が収まつたあとも、当たり前のよう立つてゐるのだ。身体を

と、次の瞬間、ベルグントが『石化の視線』を放つた。

見る見るうちに、少年の全身が石化していく。
「しまつた！」

アイリスは再び慚愧^{ざんき}の念に駆られた。

ほんの数秒間ではあったが、あの少年を救いだすチャンスならあつた。自分が飛びこみ、あの少年を抱えて跳躍していれば……。
だが、少年がベルグントの炎に耐えたという現実が異常すぎて、身動き一つとれなかつたのだ。

「グオオオオオオオオオオオオ……！」

たちまち、ベルグントが勝利の雄叫びをあげる。

その後、少年の身に異変が起きた。

全身を覆いつくしていた石灰に無数の亀裂が生じたかと思うと、ぱらぱらと剥離^{はくり}したのである。

「なつ……！」

アイリスは茫然自失。

あらゆる状態異常のなかでも、石化は特に厄介だ。

生半可な白魔道士では解除できないし、石化を解除可能なボーションは目の玉が飛び出るほど高価である。しかも、石化している間に攻撃されたら、全身が割れ碎けてしまう。もちろん、それは死を意味する。

自力で石化を解除してしまうなど、常識外れもいいところだった。

「……」

と、少年が異国の言葉で、なにかを告げた。意味はわからないが、アイリスの耳には、なんだか勝利宣言のように響いた。

次の瞬間、ベルグントが少年に襲いかかった。

さすがのベルグントも、目の前で徹底的に「常識」を覆されてしまったため、頭に血を上らせたようだ。あるいは、正体不明の恐怖に突き動かされたのかもしれない。

前足による物理攻撃。ヒューマンの胴体など、日々と真っ二つにできそうな爪が、深紅の月明かりをきらりと照り返す。

だが、少年は軽く身をかがめると、その爪を紙一重でかわした。

その流水のような動作の見事さに、アイリスは息を呑んだ。

すかさず、少年はベルグントの懷に潜りこむ。

体表面の多くを頑丈な鱗で覆われたベルグントだが、腹部だけは柔らかい皮膚が覗いている。アイリスをはじめ、多くの騎士たちが狙おうとしたが、ことごとく阻止された。ベルグ

ント自身、自分の弱点は百も承知なのだ。

だれ一人として到達できなかつたそこに、少年は易々と入りこんだ。

そして、柔らかい腹部に拳を叩きこむ。

それは一見、なんの変哲もない、ただの打撃にすぎなかつた。だが――。

「グギヤアアアアツ……！」

ベルグントが喉の奥から絞りだしたのは、あろうことか断末魔の叫びだつた。

その巨体が、ゆっくりと傾いていく。

やがて、ずん……と地響きが起こつた。

砂埃が濛々と舞いあがり、アイリスたちの視界を霞ませる。

「まさか……ドラゴンを素手で倒したというの……!?」

アイリスは呆然とつぶやくと、負傷した身体に鞭打つて、立ちあがつた。

そして、少年のもとを目指した。

銀髪の少女だった。切迫した表情を浮かべている。

まだ代の半ばと見えるが、騎士らしい風格を感じさせる。もつとも、見るからに満身創痍まんしんそういで、あられもない姿だ。白い肌のあちこちが露出していて、艶めかしい。本人は気づいていないのか、無頓着な様子だった。

「戦闘部隊の一員か……？」

イシュトは警戒しつつ、銀髪の少女と対面した。

「ここが本当に異世界だというのなら、現状、味方は一人もいないと考えたほうがいい。油断は禁物だと肝きもに銘じた。

それでも、美しい少女だと思う。

滝のように流れ落ちる銀髪が、紅い月の光を浴びて、つやつやと輝いている。肌は白磁のよう。瞳は紫水晶だ。イシュトの目には、まるで雪の精のように映った。

「…………！」

少女はしきりになにかを訴えかけているが、言葉の意味がわからない。それでも、少女に敵意がないことだけは伝わってくる。なにより、その鈴をころがすような声は、イシュトの耳に心地よく響いた。生まれてこの方、これほどの美声を聞いたことがないと思えたほどだった。

——どうしたものか……。

イシュトは焦じれた。

この異世界で、初めて接触した人物だ。できれば、この世界についていろいろと質問したい。たかが言葉の壁ごだけで、時間を浪費するのはバカバカしい。

「一つ、試してみるか。もしかしたら、魔王時代のスキルが使えるかもしれん——」

イシュトは銀髪の少女に手のひらを向けた。「しばし待て」という意味の手信号を送ったつもりだつた。通じるかどうかは謎だつたが、少女はきょとんとして、口を閉ざした。

イシュトはくるりと転身すると、完全に沈黙したドラゴンに歩み寄つた。

ドラゴンといえば、単に強いだけのモンスターではない。有史以来の情報を貯蔵し、子孫へと受け継いできた賢者としての側面もある。もちろん、異世界のドラゴンも同じだとは限らないが、情報の貯蔵庫としての役割を担つてきた可能性は考えられる。

すでに息絶えているので、知識を吸い取るならば、一刻も早い方がよい。

もちろん、目の前の少女から言語情報を抜き取ることも可能だが、身体に触れねばならないのがネックだつた。魔王の割に、イシュトには紳士的な一面があるのだ。

その点、相手がドラゴンの死骸ならば、気兼ねなく触れられるし、蓄えている情報量も桁違けたちがいだろう。

イシュトはドラゴンの頭部に手を触れた。

スキルを発動させる。

イシュートの全身が蒼白く輝いた。
その美しい光は、やがてドラゴンの体躯をも包みこんだ――。

——世界地図、地形、気候、生物、植物、鉱物資源……棲息する知的生命種の種類と分布図……世界各地の神話・伝説、歴史、魔法原理、自然科学、通貨、度量衡……等々。
イシュートが予想した通り、ドラゴンの脳は様々な情報を蓄えていた。もつとも、パワー系といふか、あまり賢いドラゴンではなかつたようで、基本情報ばかりだったのは残念だが、あるのとのないのとでは大違ひである。

今後は必要に応じて、脳裡で必要な情報を、検索し、呼びだすことができる。

この情報集を、イシュートは『異世界百科』^{リザーブ・ガイナ}と呼称することにした。イシュートの母国語に由来する造語である。

早速、基本情報を閲覧してみる。

視界一面に、大量の文字や絵図が表示された。

現在地も判明した。

「ほう……」

ここはアルカディス大陸の大半を統治する大国——レハール王国の領内。場所は「バルディオス神殿塔」。国内地図を閲覧すると、辺境地帯であることがわかつた。

総合的な文明レベルは、イシュートの祖国と大差ないようだ。ヒューマンをはじめ、様々な知的生命種が共存共栄しているという点も同じである。

なお、この王国の公用語は現代レハール語だという。

おそらく、先ほど銀髪の少女が使っていた言語であろう。ありがたいことに、ドラゴンは現代レハール語の「辞書情報」も蓄えていた。

圧縮されていた言語情報を脳裡で展開することで、イシュートは瞬時にして、現代レハール語を完全にマスターすることができた。

「いま、なにをしたの? ふしきな魔力を感じたけど……」

と、銀髪の少女が怪訝^{けげん}そうに尋ねてきた。

今度は理解できたので、イシュートは会心の笑みを浮かべた。

リスニングが完全^{かたまき}ならば、次は話せるかどうかを試す必要がある。

イシュートが口を開こうとした、そのときだった。

「——あなたは、何者ですか? 突然、この場に出現したように見えましたが……」

小さな魔法使いが、忽然と現れたのだ。まるで瞬間移動をしたように見えた。

「むつ? 妖しき技を使うやつだな……」

イシュートは警戒した。

女までが、戦闘部隊に所属していたとは意外だった。

黒ずくめの幼女は、銀髪の少女の隣に立ち、イシュートをじっと見つめている。敵意は感じないが、人形じみた無表情を浮かべてるので、なにを考えているのか読み取れない。

魔女——ふいに、そんな言葉がイシュートの脳裡をよぎった。

そう、この幼女を形容するのに、最もふさわしい言葉は、まさしく魔女であろう。とんがり帽子にローブという出で立ちは、イシュートの前世においても魔女の象徴であつた。

「妖しい技というなら、お互い様です。たつたいま、ドラゴンの死骸から情報を抜き取りましたね? とんでもない秘術です……」

「ほう、わかるのか? 見た目こそ幼いが、なかなか優秀だな」

イシュートは感心すると、銀髪の少女を見やつた。

「先ほど、お前の言葉がまったく理解できなかつたのでな。このドラゴンを利用させてもらつたぞ」

「あなたはだれ? どこから来たの? どうして、そんな力があるの?」

銀髪の少女は一步を踏みだすと、矢継ぎ早に尋ねてきた。

「待て。そう一度に尋ねられても困る」

「そう……でも、これだけはいわせて」

その真剣な表情を前に、イシュートは思わず身構えたが、

「ありがとう。あなたのおかげで、だれも死なずにすんだみたい。本当に、ありがとうございます」

少女は、深々とお辞儀をしたのだった。

これにはイシュートも面食らつた。

いくら凶暴なドラゴンを倒したとはいえ、彼女たちからしてみれば、イシュートは得体の知れぬ存在のはずだ。よほどのお人好しなのか、あるいは器が大きいのか……。

「いや……大したことはしていない。俺はただ、自分の身を守つただけだ」

イシュートは照れながら、さりげなく目を逸らした。少女が頭を下げたとたん、淡くふくらんだ胸の谷間が覗いてしまつたのだ。

ただでさえ、衣服のあちこちが破れているので、なんと目も目のやり場に困る。

元々は胸甲などを装備していたのだろうが、戦闘中に破損したらしい。かなり過酷な戦いだつたのだろう。

と、少女がふしげそつに尋ねてきた。

「ねえ、武器は持っていないの? わたしの見間違いじゃなければ……素手でベルグントを倒したように見えたけど」

「まあな。この拳で、ぶん殴つた。それだけだ」

「——そんなわけあるかああああああああつ!」

と、背後から強烈なツッコミが入つた。

現れたのは、重槍騎士の女である。

紅蓮の髪を頭のサイドで結っている。その表情はきりりとして凛々しく、いかにも騎士らしい。片足を引きずつているが、巨大な槍斧を杖代わりにすることで、なんとか歩いている。彼女も満身創痍で、防具のあちこちが破損していた。その身体は銀髪の少女よりもはるかに成熟していく、これまた目のやり場に困った。

「あいつは、『暴虐の怒石竜』——ベルグントだ！　アース・ドラゴンの最上位種だぞ！　素手で倒せるわけがないだろうが！」

「……そういうわれてもな。嘘はついていない」

イシュトは肩をすくめてみせた。

「ぐぬぬ……」

重槍騎士は喉の奥で唸りながら、銀髪の少女の前に歩み寄った。先ほどとは打って変わって、

「いかがいたしましょう？　我々が彼に救われたのは事実ですが、これほどの力の持ち主を放置しておくわけにはまいりません。彼がいかなる出自の者で、どこからやってきたのかも謎です。あのふしきな光が炸裂したと同時に、出現したようにも見えましたが……」

「だね」

銀髪の少女はうなずいた。しばらく沈黙思考していたが、やがて、イシュトに視線をもどし

た。

「そうだ。まだ名前を聞いてなかつたね。教えてくれる？」

「イシュトだ」

とりあえず、前世における愛称を伝えた。

「イシュト？　変わった名前だね」

少女は小首をかしげた。

「俺自身、まだ自分の状況が把握できていない状況でな。記憶も部分的に欠落している。これは憶測にすぎんが、どうやら一度死んだあと、この世界で生まれ変わつたらしい。赤ん坊からやり直すというのではなく、いきなり少年の肉体を得た上での再スタートというのが、なにやら腑に落ちんがな。まあ、信じる信じないは、お前たちの勝手だ。かくいう俺自身ですら、半信半疑なのだからな……」

銀髪の少女も重槍騎士も、そして小さな魔女も、真顔で沈黙している。なんと反応すればよいのやら、困つているのだろう。そのとき、やや離れた位置から、素つ頓狂な声があがつた。

「あれれーっ？　うちが気い失つてる間に、ベルグントのやつ、くたばつてるやん！」

耳の長い少女が、ベルグントの死骸の前で目をみはつてゐる。どうやら妖精族の一種、エルフらしい。燐然と輝くオレンジ・ゴールドの髪を肩先でカツ

トしており、活発な印象を与える。肩には豪奢な装飾を施した騎銃を掛けている。イシュートの世界にも銃器は存在したが、かなり趣が違う。

そんなエルフ姫の傍らには、狼と呼ぶには大柄なザルガが控えていた。額から角を生やした狼は、さすがのイシュトも初めて目撃した。こつそり「異世界百科」を検索してみると、聖獣と呼ばれる種族らしい。

「おお、目覚めたか！ 怪我の具合はどうだ？」

「重檜騎士がエルフ娘に呼びかけた

「これくらい 噛けときや治るわ！」

エルフ姫は父方に答へつゝ、イシエトがちのものとはやつてきか。その言葉とは裏腹にあぢ

「こちらはイシユト。ベルグントを倒したのは、彼だよ」

と、銀髪の少女がエルフ娘のために説明した。

「へえ。でも、こんな男の子……特別遠征部隊におったかなあ？」
服装も変やし……

エルフ娘は好奇心いっぱいの眼差しで、イシユトを見つめてきた。

「ところで、こちらが名のつたのだ。お前たちも自己紹介をしたらどうだ？」

「だね」

と応じて、まずは銀髪の少女が進み出た。

「わたしはアイリスフラウ・リゼルヴァイン。

アイリスが名のつた直後、重槍騎士がずいっと身を乗りだしてきた。

「よいか、イシユト。アイリス様を、そちらへんの騎士と一緒にしないでもらいたい。なんと
いつても、アイリス様はお高き『ロスマライセ』の白騎士なのだからな！」

「ロスヴァイセ？」
イシュトは眉をひそめた。先ほどマスターした現代レハール語に、そのような単語はなかつたのだ。

「純白の騎士の乙女」を意味する古代語だ。アイリス様の二つ名であると同時に、固有ジョブの名称でもある。固有ジョブを認められることが、どれほど名誉なことか……お前には到底わからんだろうが、肝に銘じておくがいい！ 以後、アイリス様に対し、馴れ馴れしい態度は慎むように！ そもそも、アイリス様の武勇伝が始まつたのは――」

重槍騎士の背後で、アイリスは真っ赤になっていた。なんというか、親バカな母親にべた褒めされて、恥ずかしがつている娘のような風情だった。

「イシュトが尋ねると、重槍騎士は『こほん』と咳払いをした。

「これは失礼した。我が名はランツエルーナ・カレンベルク。愛称はランツエだ。アイリス様にお仕える騎士であり、本来ならば、命を賭してアイリス様をお守りせねばならないというのに……先ほどは足を負傷してしまい、不覚を取った。……くつ！ これはもう万死に値する……！」

といつて、身悶えするランツエ。

面倒くさそうな女騎士だな……と、イシュトは呆れた。眞面目も度が過ぎると、ろくなことにならないという、典型例を見た思いがした。

つづいて、エルフ娘が天真爛漫な笑顔で自己紹介をした。

「うちちはルテッサ・オルフや。職業は獵師！ よろしゅうな！」

やたらと陽気なエルフである。堅物すぎる重槍騎士の直後だけに、余計に柔らかい印象を受けた。

と、ルテッサは、傍らで大人しくしている聖獸の背中を撫でてやつた。

「この子はうちの相棒でな、クルルや。この子を『クーちゃん』と呼んでええのは、うちだけやから、覚えといてや。あつ、それとな！ うちちは『銀狼騎士団』つちゅう名前で活動してるんやけど、リーダーはだれやと思う？」

突然、ルテッサは質問を飛ばしてきた。

「ふむ。アイリス……と見せかけて、そこの聖獸か」

イシュトが回答すると、ルテッサは愕然とした。

「なつ！ なんでわかつたんや〜!? 天才か!？」

「いや、いまの話の流れだと、そういうんだろう。わざわざ組織名に『銀狼』を冠しているしな。

こちらを引っかけようとする意図が、見え見えだったぞ」

「いや〜、参ったわ。うちら、ええ友達になれそうやん！」

ルテッサは嬉々として、イシュトに飛びついてきた。

「おつ、おい！ なにをする！」

イシュトは逃れようとしたが、ルテッサは怪我人のくせして、妙にすばしっこい。あつとう間に、イシュトの背中に密着してしまった。

そのとき、異変が起きた。

イシュトの身体を覆っていたマントの纖維が、ぼろぼろと崩壊を始めたのだ。一般的な布と比べれば異常なほど頑丈だったものの、ドラゴンのブレスを浴びたり、石化攻撃にさらされたりしたせいで、かなり痛んでいたのだろう。

そこに、ルテッサの体当たりがトドメを刺したようである。あつという間に、イシュトは全裸になってしまった。肌を隠すにも、すでにマントは原型を失っている。

「ひやつ！」

「…………」
「…………」

ルテッサはイシュトから飛び離れると、両手で目を覆つたが……こつそり指の隙間から覗いているのがバレバレだった。興味津々の年頃らしい。

一方、アイリスは頬を紅潮させながら、困ったように視線を逸らした。

対照的に、あくまでも冷静につぶやく魔女。まったく動揺していない。まるで冷徹な鍊金術師のよう目をこけて、二の耳聾く炎矢を見守つてゐる。

「いちばん可愛らしい反応を示したのは、意外にも重檜騎士のランツエだつた。

ふう……」
とりあえず、ランツエのマントを借りることで、イシュトは肌を隠すことができた。

と、小さな魔女がくるりときびすを返し、
「待て。まだ、お前の名前を聞いていいない

「イシユトが呼び止めると、

ケルタです。あなたが何者なのか、どんな理由で、どこから来たのか……興味は尽きません

が、いまは負傷者たちの輸送を優先させてもらいます」
ゲルダは淡々と答えた。事実、フロアのあちこちでは、いまも救護活動がつづいており、野戰病院さながらの様相を呈していたのである。

5

その後、怪我の具合が深刻な者から、順番に転送されていった。

しかし、イシュトからすれば、魔法の力で人や物を転送できること自体、おどろきだった。魔法文明

関しては、イシュエトの祖国よりもはるかに先進的だと思われる。地道に転送魔法が繰り返された結果、少しづつ人数が減っていく。

最終的に、フロアに残ったのは、イシュト、アイリス、ランツエ、ルテッサとクエル、そしてゲルダとなつた。アイリスたちは負傷していたが、待機中に白魔法やポーションを使用したおかげで、少しは回復した様子である。

光明神リユミエリスよ——
と、ゲルダが呪文の詠唱を始めた。

呪文に合わせて、ゲルダの足元に魔法陣が生じる。すでに何度も見せられた光景だったが、その紋様の精緻さには、溜息が洩れるばかりだった。

「開門せよ……我らを王都へ導け——ゲート・オブ・ディメンション」と、ゲルダの呪文が最後の一節にたどり着いた。

その後、全身がふしきな浮遊感に包まれ、足が地面から離れたような感覚に襲われた。

……イシュトたちが転送されたのは、小高い山の上だった。

山の端から、黎明の光があふれている。

「おお。この世界にも、ちゃんと夜明けが来るのだな……」

しみじみとした気分で、イシュトはつぶやいた。

足元には緑の草が生い茂り、葉先には朝露が光っている。

荒れ果てた神殿塔とは打って変わつて、瑞々しい光景だ。

空気は澄みわたり、早起きな小鳥たちがさえずつている。

「——あれが、王都アリオス。わたしたちが拠点とする街だよ」と、アイリスが彼方を指さした。

イシュトは見た。

見わたす限りの草原の中央に屹立する、巨大な街を。

その四方を、いかにも堅牢^{けんろう}そうな防壁に囲まれた街は、なるほど、王都と呼ぶにふさわしい威容を感じさせた。

魔王の悪癖^{かんらう}というべきか、まずは門の位置や周辺の地形をさりげなく観察する。もしく、あの街を自分が攻め落とすなら……そこまで考えて、イシュトは苦笑した。いくらなんでも、気が早いと思ったのだ。

のちほど、『異世界百科^{リザレクトガーデン}』で王都の詳細情報を得ておいたほうがよいな、とイシュトは思った。そんなイシュトのそばでは、ルテッサたちが談笑にふけっていた。

「はあ。ゲルダちゃんの転送魔法は便利なんやけどな。転送場所に制約があるのが残念やわ。ここから王都まで、徒步一時間。これが地味にツラいんや……」
「文句をいうな。そもそも、なにが徒步だ。お前はクルル殿に乗りっぱなしだろうが。どうせなら、その席はアイリス様に譲るべきではないのか?」
と、ランツエが眉を吊りあげてたしなめた。

「問題ないよ、ランツエ。わたし、歩くの好きだから」と、アイリスが苦笑はじりにいった。

「法律で禁じられているので、仕方ありません。市街地や、王都の周辺地域で転送魔法を使つてはならないのです。今回、伝令と負傷者だけは、特例として入場門のそばに転送してあげましたけど」

と解説しつつ、ゲルダは聖獣クルルの背中にちょこんと腰かけて、ルテッサの腰に手を回した。この小さな魔女も、自分の足で歩くつもりはないらしい。

「それじゃ、行こうか」

アイリスの言葉を合図に、少女たちは歩きだした。

イシュトは彼女たちを追いかけようとして、ふと、雄大な景色を振り返った。

美しい景色だった。

ならばこそ、手に入れる価値があると思った。

「一敗地に塗れたからといって、それがどうした」

思わず、口元から笑みがこぼれ落ちた。

「この世界で、やり直す。そして、今度こそ——世界を我が手に！」

「わたくしが、イシュトの後見人になる」

QUEST 2 「わたくしが、イシュトの後見人になる」

1

今日は週に一度の、朝市の日だという。

けたたましい鶏鳴が聞こえてくるような早朝だが、中央広場では商人たちが新鮮な食材や香辛料などを売っていた。

威勢の良い商人たちの声が響き、客を集める光景には活気があった。

なお、目の前の群衆を眺めると、全体の六割ほどはヒューマンだが、妖精族や獣人なども交じっている。

アイリスたちは寄り道することなく、メイン・ストリートに臨む二階建ての館に入ろうとした。

ふと、イシュトは立ち止まつた。

軒先の看板に『冒険者ギルド』と記されている。

「なつ！ 冒険者だと？」

王都支部

思わず叫んでしまう。

かつて魔王イシュトを倒した勇者たちもまた、元をたとへば一介の冒險者にすぎなかつたのである。冒險者とは、いわば勇者の卵……それがイシュトの認識だった。

「おい、どうして冒険者ギルトなんだ？」
俺のよがな不審者を確保したのなら、
治安維持の詰め所あたりが妥当だと思うが？」

「……」イシユトが尋ねると、アイリスは意外そうな顔をした。

「そつちのほうか好みなの？」イシュトが夜盗の類なら近衛騎士団か自警団に引き渡すのが筋だけ……イシュトは命の恩人でもあるし、犯罪者扱いはしたくないと思ったから

「ナニ...」

「それには、近衛騎士団も自警団も多忙な組織だから。王妃

「事情はわかつた。ところで、一つ聞
事案は冒険者ギルドの領分だと思
うが」

「わたしに答えられることなら」

「もしかしてお前たちも冒険者なのか？」
「えっ？ どこから見ても、冒険者にしか見えないとと思うけど」

卷之三

「冒険者パト

「そうだったのか……」

【行くよ イシユト】
アイリスにうながされたイシユトは、やむを得ず入館した。

建物の一階では、洒落た食堂が営業している。普通の飲食店と違うのは、壁際に巨大な掲示

板が設置されており、依頼票が何枚も貼られていることだ。

卷之三

下水道にレツドワームが大量発生中！

初級冒險者、大歡迎！

依頼票の下半分には、レッドワームとおぼしき絵が描かれている。赤くて巨大な蝨ムシ——それ以外の表現が思いつかない形狀だ。こんな氣色の悪いモンス

ターと戦わねばならぬ冒険者たちに、イシュトは心から同意なことを考えていたら、二階の一室に案内された。

「やあ！ 君がベルグントを倒したという少年かい？」

「イシュートが入室するなり、デスクに着いていた女が快活な声をあげた。

妖艶な美女だ。一般的な王都民と比べると、明らかにタイプの異なる着物を着用している。細い腰には美しい帯を巻いている。胸元を大胆にはだけ、抜けるように白い乳房の谷間を覗かせているのが、見るからに恥ましい。

もつとも、彼女の最たる特徴といえば、頭部からによつきりと生えた耳である。その色味と

形状から察するに、狐系の獣人族らしい。腰からは、ふわふわの尻尾も生えている。服に

尻尾用の穴を空けるのが大変そうだな……とイシュートは思った。

「僕はオルタンシア・レメイ・ベルダライン。冒險者ギルドの王都支部長さ」

「うむ」

「大体の事情は、先に帰還した冒險者たちから聞いているよ。なにも君を取つて食おうというわけじやないから、樂にしてくれたまえ。そもそも、君は特別遠征部隊を救つてくれたそうじやないか。支部長として、礼をいわせてもらうよ」

「いや、礼には及ばん。いきなり襲いかってきたモンスターを、独自の判断でぶん殴つた

までだ」

「はは……ベルグントをぶん殴るという発想自体が、ぶつ飛んでるんだけどねえ。まあ、掛けてくれたまえ」

ベルダライン支部長は苦笑しつつ、イシュートに応接用のソファを勧めた。イシュートは無言で腰かけた。

「それでは、事情を聞かせてもらえるかな？ 君がどういう人物なのか、正直に教えてほしい。悪いようにはしないからさ。ただし——」

その瞬間、支部長の双眸が、きらりと光つたかのように見えた。

「くれぐれも、嘘はつかないようにね」

と釘を刺しつつ、彼女は手元に設置してある小さな天秤を一瞥した。精巧な造りだが、手のひらに載るような大きさで、実用性はなさそうに見える。

「この天秤はね。その昔、とある遺跡で僕が見つけたものなんだ。見た目は他愛のないオブジェだけど、嘘を感知する機能がある」

「にわかには信じがたいが」

「では、一つ試してみようか」

ベルダラインはにやりとした。そして、まるで芝居の主役にでもなったかのように、声を朗々と張りあげた。

ベルダラインはにやりとした。

そして、まるで芝居の主役にでもなったかのように、声を

「ああっ！ 僕は支部長という仕事に誇りを感じているんだ！ なんとやり甲斐のある仕事だらうか！ まさしく天職だね！ 僕は冒険者たちを心から愛している！ こんな日々が、いつまでもつづくことを心の底から祈っているよ……」

その後、天秤に象嵌されている水晶がカツと鮮烈な光を放つと、天秤棒が左右にカタカタと激しく揺れた。いまにも自壊するのではないかと、心配になるほどの勢いである。

「どうだい？ 理解してくれたかな？」

ベルダラインは得意満面である。

「ふむ。お前が自分の仕事に誇りも名誉も感じじないだけは、よくわかった。」

「いや、そんなに褒められると照れてしまうね」

「褒めたつもりは微塵もないが、大した機巧仕掛けだな」

「超古代に造られた聖遺物の一種だね。そういうわけだから、その場しのぎの嘘で切り抜けようなどと考えるのは、お勧めしない。いいかな？」

「よかろう」

イシュトは毅然として、自己紹介を始めた。

「我が名はイシュト。正式にはイシュヴァルト・アースレイという。かの暗黒大陸を支配する魔王にして、世界征服という野望に挑みし者であった」

「なんだつて？ ちょっと待ってくれ」

ベルダラインは眉をひそめると、手元の天秤を見た。微動だにしていない。

「……つづけてくれたまえ」

「うむ。だが、あの忌まわしき日――魔王城に潜入した勇者どもを迎撃すべく、この俺自ら戦つたのだが……どうやら敗北を喫したらしいな」

「らしい、というのは？」

と、ベルダラインが鋭く尋ねてきた。

「どうにも困ったことに、記憶の一部が欠落しているのだ。どうしても決定的な瞬間が思い出せん。容赦なく殺されたような気もするが……とにかく目が覚めたら、この世界にいた。しかも、新しい肉体を手に入れていた。俺が思うに、こちらの世界で生まれ変わったらしいな」

「ええと……」

ベルダラインは、再び天秤を見た。やはり、天秤は静止したままだ。

「…………」

ベルダラインは、言葉に窮した表情を浮かべていたが、やがて、独特な形状をした煙管をくわえると、暢気に吸い始めた。

「おい。なにを勝手に一服している？」

イシュトが注意するも、ベルダラインは深刻そうな表情で煙を吐いた。

「ふう……君が嘘をついていないのは、たしからしい。実際、この天秤はびくりとも反応しな

かつたのだからね」

「むろんだ。なに一つ、嘘などついてはいない」

「ああ、なんと不憫な！　まだ若いのに、よほど悲惨な目に遭わされたらしいね。奴隸の密売組織から逃げだしてきたのかな？　あるいは、どこかのカルト宗教団体に洗脳されてしまつたのかな？　きっと、自分を世界最強の魔王様だと思いこむことで、なんとか精神の均衡を保つていたのだろうね……この天秤の機能は、あくまでも嘘を見抜くこと。だけど、本人が虚構を真実だと思いこんでいる場合は、役に立たないんだ」

「おい」

「そもそも魔王だなんて、お伽噺とぎばなしの登場人物じゃないか。実在するわけがないだろう？」ついでにいえば、毎回、決まって勇者たちに討伐されてしまうやられ役だ。あんなモノに浪漫ろまんを感じる輩なんて、よほどの物好きか変態さんだよ」

「ぐぬぬ……」

魔王という存在が全否定された瞬間だった。

とはいっても、有益な情報が聞けたのも事実である。

現時点において、この異世界に魔王は存在しない。あくまでも、物語作品のキャラクターだと認知されている。

それはつまり、ライバルが不在ということでもある——。

3

「なにはともあれ、イシュト君。いまの君は、由々しき状況にあるね」

魔王云々の話題を切りあげると、ベルダラインは大真面目まじめにいつた。

「いや、そうでもないと思うがな」

イシュトは真っ向から否定した。

「第二の人生を許されたのだから、宝くじで一等賞を当たたよくなものではないか？」

「本当にそう思うのかい？　身元は不明、住所は不定、所持金ゼロ、装備もゼロ。極めつき

は——無職だ！」

「おい。いま……無職といったか？」　いうに事欠いて、この俺を……！」

「そう、無職さ。そんな君が、この街で生きていこうと思うと、難儀だね。相當に難儀だ。うん、やはり選択肢は一つしかないかなあ」

「思われぶりない方はやめる。その選択肢とやらを、さつさといえ

「冒險者だよ」

「なつ！　冒險者になれというのか!?　けしからん！　実にけしからん！」

「いや……いまのままだと、冒險者になるのも難しいね。単に資格を得るだけでも、いろいろ

と満たすべき条件がある。まずは後見人を見つけなくちゃね」

「たとえば、どのような人物だ?」

うつかり質問してしまつてから、イシュトは顔をしかめた。これではまるで、自分が冒險者になりたがつてあるみたではないか。

「社会的地位のある人物だと理想的だね。王侯貴族とか、学者とか、富豪とか」

「ふん。俺は生まれ変わったばかりだぞ。そんな御大層な知り合いがいるはずもない。いや、

それ以前に、冒險者になるつもりはない!」

「困ったな。どうしたものか。残念ながら、たかがギルドの支部長にすぎない僕なんかに、後見人としての資格はないしなあ。ああ、困った! 本当に困ったよ! どこかに親切な人がい

ないかなあ……」

どうにもベルグラインの態度は鼻についた。困った困ったといいながらも、なにやら楽しんでいるようにも見受けられる。

「そういうことなら——」

と、突然、ずっと無言で佇立していたアイリスが口を開いた。

「わたしが、イシュトの後見人になる」

その瞬間、室内は沈黙に満たされた。

「わたしじゃ、ダメかな?」

アイリスの眼差しは真剣だった。

ようやく金縛りがとけたように、ランツエがまくし立てる。

「なにをおっしゃいますか、アイリス様! たしかに、この少年の境遇には同情します! だからといって、アイリス様が後見人になるなど、そんな軽々しいことを! ご自分のお立場を考えてください! 絶対に反対です!」

「落ち着きなさい、ランツエルーナ

と、アイリスが告げた。

その口調こそ淑やかだったが、ランツエは鞭で打たれたように沈黙し、かしこまつた。

「はっ、アイリス様!」

「わたしを中心とした上で忠告、ありがとう。だけど、もう決めたことだから

「……かしこまりました」

意外にも、ランツエは大人しく引き下がつた。

「いやー、計算通り——うおっほん! さすがはアイリス嬢! ありがとう! 心からあり

がとう!」

この牝狐、かなり腹黒い人物ではなかろうか……とイシュトは思った。

「決まりだね」

と、アイリスはイシュトの正面に立つた。

「改めて、よろしくね。イシュトなら、いい冒険者になれると思つ」

「待て。まだ冒険者になると決めたわけではないのだが……」

「大丈夫。その強さがあれば、問題ないよ。正直にいうとね……わたし、イシュトの強さに興味がある。わたしも、あんなふうに戦えたらしいなって」

と、アイリスはイシュトをじっと見つめた。

紫水晶さながらの瞳に、イシュトの顔が映りこんでいる。

イシュトは思わず、どきりと心臓を跳ねあげた。

そのとき、ランツエが二人の間にすかずかと割りこんできた。

「うおっほん！ アイリス様、そろそろ帰らねばなりません。お忘れですか？ 本日は、『昼食会』の日です。湯浴みに衣装合わせ、ヘアメイク……やることが山積みですよ」

【もう……残念】

アイリスは、意外に子どもっぽい表情を見せた。

「というわけで、支部長殿。彼については、お任せします」

ランツエはベルダラインに断ると、アイリスの背中を押しつつ退室してしまった。アイリスは名残惜しそうな表情を浮かべていたが、ランツエは妙に強引だった。

「ほななー、イシュト！ ベルグントを倒してくれて、おおきに！」

ルテッサも笑顔で手を振ると、聖獣クルルを連れて立ち去った。

【……ふう。ゲルダも帰ります】

小さな魔女も腰を上げたが、急にイシュトを振り返ると、まるで幼児が初対面の大人を見あげるような目で、じーっと見つめてきた。

「なんだ。俺の顔に、なにかついているのか？」

【……いえ。なんでもないです】

ゲルダはそっぽをむくと、今度こそ退室した。

おかしな魔女だな、とイシュトは思つた。

結局、支部長室にはイシュトとベルダラインだけが残された。

【一つ、気になることがある】

と、イシュトは切りだした。

【なんだい？】

「あのアイリスという女騎士についてだ。どうして冒険者などという、因果な商売をしているのだ？ 俺の後見人になる資格があるということは、よほど高貴な身分なのだろう。冒険者として働く必要など、あるとは思えんがな」

ベルダラインは苦笑した。

「他意はない。この世界の情報ならば、一つでも多く集めておきたいだけだ」

イシュトは素っ気なく答えた。

ベルグントの死骸から入手した『異世界百科』^{リザレクション・ガイド}は、どうしても巨視的になりがちだ。たとえ
るなら、本物の百科事典から主要項目だけを抜きだしたようなものである。市井の問題については、自分で調べるしかないのだつた。

「まあ、アイリス嬢はね、いろいろ抱えてるんだ。僕の口からいうわけにはいかないけれど、仲良くなれば、教えてもらえるかもしれないよ?」

「そんなつもりはない。そもそも、俺は冒険者という連中が――」

「おっと、そろそろ本題にもどろうか。この世界について、そして冒険者制度について、微に入り細を穿つレベルで説明しようじゃないか! そもそも冒険者とは――」

「人の話を聞かんか……」

イシュトは困惑したが、ベルダラインは聞く耳を持たず、嬉々として講釈を始めた。

QUEST 3 「投石をバカにするものは投石に泣く!」

1

「……まったく、あの牝狐め。^{めぎつね}人の話を聞かんどころなど、魔族の女たちといい勝負だな」
ようやくベルダライン支部長の講義から解放されたイシュトは、大通りをてくてくと歩いていた。

魔王時代のイシュトが街を闊歩しようものなら、魔族たちは素早く道の両脇に下がり、^{りょうわき}
平伏したものだが……こうして歩いていても、だれも自分に注目しないのは、なんだか新鮮な気分だった。

ちなみに、いまのイシュトは木綿の服を身に着けている。さすがに、裸体をマントで隠して
いるだけでは不便だし、不審者扱いされても文句はいえないでの、冒険者ギルドに支給しても
らつたのだ。

イシュトの目から見れば珍妙なデザインだったが、王都アリオスでは標準的なデザインらしい。
これは文化の違いというものだろう。

「はあ……冒険者か」

イシュトは屈辱的な気分でつぶやいた。

たしかに、イシュトのような異世界人が法律を犯すことなく、手つとり早く稼ごうと思つたら、冒険者になるくらいしか道はなさそうである。

魔王としては、

——この俺が法律だ！ 異国の法律など、破るためにある！
と一笑に付してやりたいところだったが、なにぶん勇者に敗れたばかりである。ここは慎重にならざるを得なかつた。

それに、このヒューマンじみた身体に、どれほどの能力が秘められているのかも、まだ把握しきれていない。

——魔王時代の能力が、どこまで受け継がれているのか？

時間をかけて、じっくりと検証する必要があると思つた。

「——あのう……お花はいかがでしょうか？」

と、胸元に一輪の花を差しだされたので、イシュトはびたりと足を止めた。

その花びらは、目にも鮮やかな黄色だ。楚々とした花だった。甘さと清涼さを兼ねそなえた香りには、心を落ち着かせる効果が感じられた。

実際、もやもやと胸の奥底でわだかまつていた気持ちが、洗い流されたような気がしたので

ある。

「……ふむ。佳い花だ」

イシュトは素直に、自分が感じたことを口にした。

「あっ、ありがとうございます！」

花売りの少女は、まだ商売に慣れていないらしく、緊張氣味に応じた。なんとなく、彼女自身が手にしている花に、よく似ていると思った。

年齢は十代の後半だろう。やや癖のある金髪を後頭部で結い、背中に垂らしている。透き通るような瞳は、緑柱石の色をしている。

全体的に地味で、おどおどした様子が感じられるが、胸も尻も見事に発育している。もつと自分に自信を抱いてもよさそうなものだが、本人は自分の魅力に気づいていない様子だった。よく見ると、耳の先端が尖つている。エルフに似ているが、純血のエルフほど長いわけではない。ハーフエルフなのだろう、とイシュトは推測した。

イシュトにまじまじと見つめられ、恥ずかしく思つたのだろうか。少女はうつすらと頬を染めながら、申し出た。

「えっと、一輪が十リオンになりますが、よろしければ……」

少女の口調は遠慮がちだ。声も小さいし、ただただ恐縮している様子だった。とても商売にむいているとは思えない。

商売人には、ある程度の団々しさも必要とされるものだ。こんな売り方では、いつまで経つても売れないだろう。

そもそも彼女の衣服を見れば、異文化圏で暮らしていたイシュトの目から見ても、田舎者なのは一目瞭然だった。この洗練された王都に溶けこめていないのは、明らかだ。

手慰みに、一本くらい買つてもよいかと思ったが、自分が文無しであることを思い出し、イシュトは溜息をついた。

「すまんな。この世界……いや、この街に流れ着いたばかりで――」

イシュトが断ろうとした、その矢先だった。

「おい！ ぼけっと突っ立つてんじゃねえぞ！」

ひときわ大柄な通行人が、少女を乱暴に突き飛ばしたのである。

「ひやんっ！」

バランスを崩した少女が転んだ拍子に、携えていた花が乱雑に撒き散らされた。その上を、

次々と通行人が通りすぎていく。あつという間に、色とりどりの花は踏みにじられてしまった。都会の雜踏の残酷さが、まさ

まさと感じられた。

「ああ……！」

地面に這いつくばった少女が、悲痛な声をあげた。

「ん？ なんだ、『誤爆エルフ』のリッカじやねえか！ 花売りにでもジョブ・チエンジしたのかあ？」

その身長は二エイル（＝約二メートル）を超えており、筋骨隆々とした体躯に革鎧を装着している。腰には立派なロングソードを佩いていた。

「ははっ！ こいつは傑作だな！ 天職が見つかって良かつたじゃねえか！ もう一度と黒魔

法は使うんじゃねえぞ！ 冒險者の面汚しめ！」

「弟よ、そのへんにしておくがいい。我らはアンデッドの討伐任務を控えている。悪名高い『誤爆エルフ』なんぞに関わり合っていたら、縁起が悪いだろう」と、もう一人の男が、傲岸なりザードマンの背後から現れた。

こちらは魔道士系のリザードマンだった。戦士系リザードマンの兄らしいが、弟よりも頭一つ分は小柄で、ほつそりとしている。

見るからに粗暴な弟とは対照的に、魔道士系の兄は冷静沈着な様子だが、目の前で転んでいるハーフエルフを蔑んでいるという点では、一致しているようだった。

どうやら、花売りの少女——リッカと呼ばれたハーフエルフは、嫌われ者らしい。『誤爆工

ルフ、などという、珍妙な渾名も気になつた。
……ふと、イシュトは気づいた。

先ほど戦士系リザードマンは、リッカを「冒險者の面汚し」と呼んだのだ。

ということは、リッカも冒險者ということになる。

本職が冒險者なら、どうしてリッカは花を売つたりしていたのだろう？ と、イシュトは疑

問に思つた。

「いいか！ 二度と冒險者ギルドに顔を出すんじゃねえぞ！」

戦士系リザードマンは毒々しい捨て台詞を吐くと、歩きだした。大柄な戦士が肩をそびやかしつつ闊歩すると、通行人たちは慌てて道を空けた。そんな弟の背後を、兄が静かに歩いていく。

事情はよくわからないが、イシュトは強烈な不快感を覚えた。一方的に因縁をつけてきたと思つたら、リッカが売つていた花を台無しにしたのだ。

「おい、その二匹」

イシュトはリザードマン兄弟の背にむけて、鋭い一声を放つた。

「ちょおっ！ てめえ！ いま、なんつった!?」

たちまち戦士系リザードマンが振り返り、イシュトを睨みつけた。ずんずんと、こちらに引き返してくる。地響きが聞こえてきそうな迫力があつた。

「そこの一匹、といった」

イシュトは淡々と返しつつ、戦士系リザードマンの顔を見上げた。相手のほうが、頭二つ分は上背がある。

「『一匹』じゃねえよ、こらあ！ リザードマンをトカゲ扱いしてんじゃねえぞ！」

「ふつ」

イシュトは失笑した。図らずも、相手のコンプレックスを刺激してしまつたらしい。

それでも、このリザードマンは気づいているのだろうか。

いま彼は、その巨体を最大限に活用して、イシュトを見下ろしている。自分がドラゴンで、もなつた気分で、偉そうに振る舞つている。

だが、事実は逆だ。イシュトこそがドラゴンであり、たかがリザードマンことさ、まさしくトカゲにすぎない。

ちょうどいいだろう、とイシュトは思つた。

この新しい肉体が、どの程度使えるものなのか、試してみたくなつたのだ。

たしか魔王時代の自分には、視線に様々な状態異常を付与するスキルがあつたと記憶している。いわゆる眼術だ。ヘルゲントが使つていた『石化の視線』に似てゐるかもしれない。

「てめえ！ なにを笑つてやがる！」

と、戦士系リザードマンが業を煮やし、猛然と襲いかかってきた。腰の剣は抜かずに、殴り

かかつってきたのだ。

街中で剣を抜こうとしないあたり、まだ理性は働いているようだ。腐つても冒險者ということが。

もつとも、武器を使おうが使うまいが、トカゲがドラゴンに勝てる道理はない。

「頭が高い」
イシュトは涼しげにつぶやくと、深紅の瞳を爛々と輝かせた。

互いの視線がぶつかる。

「——!?」

次の瞬間、戦士系リザードマンが全身を硬直させた。振りあげた拳も、ぴたりと停止してしまう。

「おい、貴様！ わたしの弟になにをした!?」
と、魔道士系リザードマンが金属製の杖を構えつつ、イシュトに問うた。いまにも魔法を使いそうな様子である。

「心配するな。命に別状はない。ちょっとした眼術を——」

イシュトの説明が終わらぬうちに、戦士系リザードマンが動いた。

突然、兄を振り返ると、まるで少女のような仕草で駆けよったのだ。

「お兄様！ 早く逃げましょう！ あたしたちが敵う相手じやないわっ！」

「ちょつ！ おい、弟よ！ なにを血迷つていいる!?」

兄がうろたえるのも無理はない。

弟は著しい変貌を遂げていた。臆病な顔つきで女言葉を話し、なよなよとした仕草で兄にすがりついている。先ほどまでは戦士らしく、肩で風を切りながら歩いていたというのに、いまや内股になつてている。

「あのね……ずっと黙っていたけど、あたし、お兄様が好きなの！ 好き好き大好き！ 愛しているわ！ ああ、お兄様！」

弟は叫ぶと、兄に熱烈なキスをした。あろうことか、唇と唇を重ねたのだ。

「ええ……」

野次馬一同、もはや困惑顔である。だれかが「誰得だよ……」とつぶやいたが、まさしく全員に共通する思いだつただろう。

「おい、貴様あ！ わたしの弟に、なにをした！ こいつは勇猛果敢なリザードマン戦士だつたのだぞ！」

魔道士系リザードマンが泣き顔になつて、イシュトに文句を飛ばしてくる。

その間もすつと、逞しい弟の熱烈なキスや頬ずり、そして抱擁を受けているのだから、ご愁傷様としかいよいよがない。

「いや、なんというか……すまん」

イシユトは頭をかきながら、ぼそりと答えた。

「すまんですむかあつ！ ちゃんと説明しろっ！」

「うむ。俺としてはだな 状態異常の一種——“チキン”にしてやるだけのつもりだった。術が成功すれば、お前の弟は臆病風に吹かれて、脱兎のごとく逃げだすはずだった……」「いやいや、“チキン”なんてレベルじゃねえぞ！」

「そうだな。俺自身が記憶の一部を失っているせいだろう。どうやら手元——いや、目元が

狂つたらしい。おそらくは、‘混乱’と‘女体化’が勝手に追加されてしまったのだろうな」

イシユトは肩をすくめると、溜息をついた。
「はあああつ!? 混乱しそうだらう！ というか……女体化だとおおおつ!! そんな状態異常 なんて聞いたこともないぞ！」

魔道士系リザードマンは目を剥いた。

事実、弟の肉体には微妙な変化が加わっていたのである。

先ほどまでは筋骨隆々だつたはずが、いまでは柔軟な印象を帶びている。胸元も、ほのか にふくらんでいる。ということは、下半身は——。

「なんてことをしてくれたんだあつ！ 弟の一生を台無しにしやがって！ いずれは部族を率 いる頭領になる男なのだぞつ！ 自慢の弟が……妹になつてしまつた！」

「問題ない。一ヵ月もすれば自然に治る……と、思う」

「と思う!? なんだ、その無責任な発言は！」

「仕方あるまい。俺自身、まだ自分の能力を把握できていないのだからな。いますぐ治したけ れば、腕のいい白魔道士にでも解除してもらうんだな。こちらの世界では知られていないよう だが、女体化といっても、しょせんは状態異常の一種にすぎん」

「そつ、そつか！ 白魔法で治せるのだな！ いいたいことは山ほどあるが、まずは弟の治療 が先決だ！」

魔道士系リザードマンは、弟の執拗な抱擁を受けながらも、なんとか退散した。
「なんだつたんだ、一体……」

「あのリザードマン兄弟、名の通つた冒險者だつたんだがなあ」「いや、気持ちの悪いもんを見せられたぜ」

と、周囲に集まつていた野次馬たちが口々にぼやきながら、解散していく。
「あつ、あの！ 危ないところを助けていただいて、ありがとうございました！」
と、リツカが感謝の気持ちを告げながら、イシユトの前で何度も頭を下げた。

「気にするな。俺が勝手にしたことだ」

「それにしても、ふしぎなスキルをお持ちなのですね？」

「いや、まあ……俺自身、困惑氣味でな。力の使い方を間違えてしまつたようだ……。といふ で、お前も冒險者らしいな?」

「あ、はい……一応は」

なぜだか、リツカはサッと目を逸らしてしまった。なにやら深い事情を抱えているようだが、そこに踏みこむのは、さすがにお節介だろうと思った。

「冒険者ならば、知っているのではないか?『王立冒険者養成校』とやらが、このあたりにあるはずなのだが」

「養成校ですか?この通りをまっすぐに進めば、すぐですよ」

といって、リツカは進行方向を指さした。

「そうか、礼をいう」

イシュトは微笑で応じると、その場を去つた。

2

本音をいえば、冒険者などになりたくはない。

だが、日々の糧を得ようとしたら、働かねばならない。

かつては魔王として、なに不自由ない暮らしを許されていたイシュトだが、いまは無名の少年にすぎないのである。

ベルダライン支部長がいうには、この世界で手つとり早く独立しようと思ったら、やはり冒

険者がいちばんだという。そして、冒険者になるためには、ギルド傘下の養成校に入らねばならない――。

リツカに教えられた通りに、イシュトは大通りを歩いていく。
やがて、目的地に到着した。

――王立冒険者養成校。

目の前には、いかめしい門扉もんびが屹立きりつしている。

広大な敷地の周囲は、ぐるりと煉瓦造りの堀で取り囲まれている。

目の覚めるような芝生のむこうに、二階建ての校舎が見えた。

と、まだ児童の面影を残した少年や少女が、次々とイシュトを追い越し、門をくぐり抜けていった。イシュトと似たような私服姿の者が大半だが、なかにはレザー製や金属製のアーマーを身に着けている者も含まれていた。気の早い連中だ、といシュトは思った。

なお、講習は毎日のように開催されているという。

入学料及び受講料については、入学時にまとめて支払うコースと、いつたんギルドに立て替えてもらい、晴れて冒険者になったあとで支払うコースが設けられているそうだ。

イシュトは文無しなので、後者を選択するように、とベルダライン支部長からアドバイスを受けていた。

のだ。一流的冒險者が、いずれ勇者となつて、魔王を倒しに来る……そだ、戦略的見地に立てば、敵を知ることも重要……うむ、行くぞ！」

無理やり自分を納得させると、イシュートは校門をくぐり抜けた。

最初の一時間ほどは、手渡された書類に必要事項を記入しているうちに過ぎ去った。

アイリストが後見人になつてくれたおかげだらうか。入校申請は、おどろくほどスムーズに終わつた。

さて——冒險者になるためには、この養成校を卒業する必要がある。資格取得までに要する期間は、最短でも三ヶ月。成績が悪いと、一年を要する場合もあるそだ。

なお、最初に「見習騎士」か「道具士」のどちらかを選択するよう、と職員から説明を受けた。前者は戦士系の志望者、後者は魔道士系の志望者が選ぶというが、厳格な決まりはないそだ。

イシュートは見習騎士を選択した。

3

午後になり、いよいよ第一回目の講習が始まった。

敷地内の演習場に集結した生徒たちは、ざつと三十名ほど。
男女比は六対四くらいである。また、全体の七割ほどがヒューマンであり、残りは妖精族や亜人種であつた。

「それでは、第一回目の講習を開始する！」

見るからに屈強そうな教官が現れると、挨拶もそこそこに怒鳴つた。

つるりと禿げた頭に、太い眉。濃い口髭。割れた額。頬にはひとつすじの古疵が走つている。
筋骨隆々な体躯には、年季の入つたレザーアーマー。年齢は五十代の半ばだらうか。まだまだ意気軒昂なので、現役の冒險者かもしれない。

「各々の職業には固有の能力がある。これを『アビリティ』と呼称する。もちろん、見習騎士にだつてアビリティはあるぞ！　おい、そこのお前！　なんだかいつてみろ！」

唐突に指名され、最前列にいた生徒は震えあがつた。

「すみません！　知りません！」

「罰として腕立て伏せ百回！　お前は予習もしとらんのかつ！」

答えられなかつた生徒は、泣きながら腕立て伏せを始めた。

「よく聞け！　見習騎士のアビリティは投石だ！　今日は早速、投石訓練を始める！」
といつて、鬼教官は演習場の一角を指さした。投げるのにちょうどいい大きさの石が、大量

に準備されている。一方、そこから離れた位置には、等身大の藁人形が五体ほど並べられている。まさしく訓練施設の趣があつた。

「いいか！ 投石をバカにするものは投石に泣く！ たつた一つの石ころが血路を開くことだつてあるのだ！ 肩が外れるまで——否！ 外れても投げつづけろ！」

鬼教官の指示で、五人が一組となつた。全部で六組。イシュートは書類を提出したのが最後だったので、第六組に編入された。

——ふう……かつたるいな。まるで幼児の遊びではないか。まあ、投石をバカにするな、という教えには同意するがな。

未熟な少年少女たちが投石をする姿を眺めるのは、なんとも退屈だつた。やがて、イシュートを含む第六組の番となつた。

五人が横並びとなつて、投石を開始する。

等間隔に並べられた藁人形との距離は、約二十エイル。

仕方なく、イシュートも周囲の受講生たちに倣つて、足元の小石を拾いあげた。

「……無力な案山子よ、我が足元にひざまずけ！」

呪文のように唱えながら、腕を振りかぶる。もちろん全力を出すつもりはない。遊び半分で、軽く放り投げた。

ひゅんっ！ と風切り音が鳴り——

大爆発が発生した。

青空に響きわたる轟音。

吹き荒れる爆風。濛々と舞いあがる砂煙。

だれもが驚愕し、地面に這いつくばることしかできなかつた。あの鬼教官ですら例外ではなかつた。

やがて、視界を遮っていた砂塵が收まり、視界が晴れたとたん、鬼教官は度肝を抜かれたようになんだ。

「なつ！ なんじやこりやあ!?」

尻餅をついた鬼教官をはじめ、受講生たちも啞然としている。

広大な演習場の約半分が破壊され、巨大なクレーターと化していた。

幸いにも、全員がイシュートの真横か後方に位置していたし、他に演習場を利用していた者もいなかつたので、だれも巻きこまれずにすんだ。

しかし、あの投石が校舎を巻きこんでいたりしたら、あるいは演習場の外で炸裂していた場合は、大惨事となつていただろう……。

「…………」

いた者は皆無だつたろう。

当のイシュトにしても、

——ひょつとして、俺がやつたのか？

と、半信半疑に思つたほどである。

やがて、ふらふらと立ちあがつた鬼教官が、震え声でつぶやいた。全身が砂まみれになつて

いる。

「いまのは……もしや究極の黒魔法、メテオライト・オブ・アルマゲドンか!?」

歴戦の強者といった雰囲気をかもしだしていた鬼教官が、いまではもう、すっかり怯えきつてゐる。

居合わせた受講生たちも、ようやく正氣にもどつたらしく、ざわざわと私語を始めた。

「本当にメテオ……だつたのか？」

「でも、だれがなんの目的で撃ちこんだつていうんだ？」

「こんな養成所を攻撃したところで、だれの得にもならないと思うけどな」

「だつて、あの教官がメテオ……といったじやないか」

「メテオ……といえば、もはや伝説級の大魔法だろ？」

「もし本物のメテオ……だつたなら、一生の想い出になるぞ！」

受講生たちの反応をうかがつてゐるうちに、イシュトは事態の重さを理解した。

イシュトにとつては、ただの投石にすぎなかつたのだが……まさか、こんな状況を引き起こしてしまつとは、難儀な話である。

不幸中の幸いは、だれもイシュトの仕業しゃぎょうだと気づいていないことだろう。実際、何者かが外部から攻撃魔法を撃ちこんだと考えたほうが、よほど常識的である。

そのときだつた。

クレーターの底で、異変が生じたのだ。土砂が次々と吹き飛んで、地盤の下からわらわらと異形の怪物が湧きだしてくる。

「あつ！ あれはレッドワーム！」

「まさか！ さつきの爆発は、レッドワームの仕業しゃぎょうだつたのか？」

「いや、レッドワームにそんな力はないんじや？」

「ごちやごちやうるさい！ 早く逃げろ！」

目の前のクレーターは、いまやレッドワームの巣窟そうくつと化してゐた。

その気持ち悪い光景を前に、生徒たちは逃走を始めてゐる。さすがに冒險者の卵だけあつて、パニックを起こさなかつたのは立派だつた。

一方、イシュトは投石位置から一步も動くことなく、モンスターの大群を眺めている。個体差はあるものの、全長は十エイルを超すものが大半である。無数の環節が連なつた構造体であり、体表は濃赤色で、てられてると濡れ光つてゐる。

まさしく、ミミズにそっくりな化け物だった。

ただし、頭部に相当する位置には、円形の唇がそなわっている。その縁に沿って、凶悪な牙がびつりと生えており、ただの巨大ミミズではないのだと主張している。あそこに首や手足を突つこんだりしたら、一瞬で噛み千切られるだろう。

「おいつ！ その少年！ お前も早く逃げろーっ！」

避難誘導に徹していた鬼教官が、いまさらながらイシュトに気づき、大慌てで叫んだが、イシュトは黙殺した。

そうこうしているうちに、レッドワームは次々とクレーターから這いだってきて、イシュトを目がけて殺到した。

まるで、真っ赤な大波が迫るような光景だつた。

「ふん。数は多いが、単体の戦闘力はドラゴンの足元にも及ばんか」

イシュトは冷静沈着に、足元の小石を拾いあげた。

訓練用の小石は、その大半が受講生たちに使われていたが、かろうじて五つほどが残つている。

それだけあれば、イシュトには充分だつた。

イシュトはやりとした。

いまの自分がどの程度戦えるのか、改めて試すチャンスだと確信したのだ。

「蟲どもよ！ 僕を魔王と知つての狼藉か！」

イシュトは一喝すると、投石した。

その石ころが大群の中央に到達するやいなや、またしても大爆発が発生した。

大半の蟲は、跡形もなく消滅してしまう。かろうじて直撃を免れた蟲にしても、ある個体は空中に吹き飛ばされ、ある個体は地底に叩き落とされた。

それでも、レッドワームの群れは知能が足りないのか、次から次へと地上に這いだしてくる。先ほどの一撃で数十匹は始末したはずだが、あつという間に補充されてしまつた。

「よかろう。とこどん付き合つてやる」

イシュトは嗜虐的に嗤うと、次の石を手に取つた。

「バカな！ なにが起きている……？」

受講生たちを避難させながら、禿頭の鬼教官は戦慄していた。

いつものように投石の講習をしていたところ、突然、大魔法級の大爆発が発生し、訓練施設の半分ほどをクレーターに変えてしまった。それだけでも異常事態だというのに、今度はクレーターの底部を突き破って、下水道に巣

くつていたレッドワームの群れが這いだしてきた——。

「そっ、そっだ！　まだ一人、受講生が残っていたはずだが！」

そのとき、鬼教官は見えた。

レッドワームの大群が、新たに発生した大爆発により、吹き飛ばされたのだ。そして粉塵が晴れた頃、投石位置を示す白線のあたりには、一人の少年が余裕たっぷりの表情でたたずんでいた。

「あの受講生、何者だ!?」

漆黒の髪に、深紅の瞳。見るからに線の細い少年だが、彼が小石を投げた直後、さらなる大爆発が発生した。

「まさか！　一度目の爆発も、彼の仕業だったというのか!?　たかが投石で、あの威力……とんでもない逸材だ！　彼こそ次代を担う冒險者……そうだ、『勇者』にだってなれる存在だ！　彼といい、アリス殿といい、次世代は人材に恵まれていてる……！」

切迫した状況も忘れて、鬼教官は称賛の声をあげたのだった。

イシュトが足元の小石をすべて投擲し終えたとき、レッドワームの侵攻は収まつた。

すでに演習場の土壤は根こそぎえぐられて、惨憺たる状況になつていて。校舎と防壁が残存しているのが奇跡のように思えるが、もちろん、イシュトが自分なりに威力を加減した結果

である。

イシュトは戦闘中にもかかわらず、一度目の投石を基準点にして、自分の能力を探つていたのだった。

「ふん、他愛のない連中だ」

イシュトがきびすを返そうとしたそのとき、轟音が響きわたつた。

地面が揺れたほどだ。これまでのレッドワームとは比較にならない、巨大な個体が地盤を突き破つて現れたのだった。

環節体の大半は、まだ地下空間に収まつたままであり、その全貌はうかがいしれない。一般的なレッドワームと違い、その体表面は硬そうな外殻に覆われている。

「あれはキングワームだ！」

という叫びが、どこかからあがつた。

「ふん。やつとボスのお出ましか。たとえ虫けらといえども、キングの称号を持つ者ならば、一丁重に出迎えてやらねばなるまい。互いに『王』を名のる者同士、心ゆくまで殺し合おうではないか」

イシュトは、やりとした。

と、意外な迅速さで、キングワームの頭部が迫りくる。

円形の唇が大きく開き、びつしりと生えそろった牙が見えた。牛馬をも丸呑みできうる大さだつた。

イシュトは『異世界百科』(リザレクタライダナ)を使つた。すぐさま網膜に各種情報が表示される。

キングワームは有名なモンスターらしく、かなり詳しい情報を得ることができた。

「……ふむ。あの外殻の硬度は、金剛石に匹敵するというのか……なかなか厄介だな。ならば、内側から攻めるとするか」

イシュトは身をかがめると、キングワームの肉迫を回避するのではなく、あえて正面衝突を狙つて跳躍した。

瞬時に、キングワームの口腔(こうこう)に飛びこむ。

イシュトの全身が唇を通過した直後、見るからに凶悪な牙ががちりと噛み合わされた。一瞬、イシュトはふくらはぎに軽い衝撃を覚えたが、痛みはなかった。

背後を振りかえると、キングワームの牙が無惨にも折れていた。どうやらイシュトのふくらはぎを嚙もうとした直後、折れてしまつたらしい。

「ほう。物理攻撃も完全に防ぎきつたか。見た目はヒューマンそのものだが、なかなか便利な身体だな」

イシュトは苦笑を洩らしつつ、腰を上げた。

киングワームの口腔は、真っ暗で、生臭く、ヌメヌメとしている。思わず顔をしかめた。

魔王の瞳には暗視スキルがそなわっているのだが、ヒューマンとなつた身体にも継承されていた。深い闇に包まれていようと、周囲の状況を容易に把握できる。

「ぐつ、生臭いな……さつさと剝して、脱出しなければ」
『異世界百科』によれば、闇雲に攻撃したところで、キングワームはなかなか死なないそうである。肉体の大部分は腸管で構成されており、適当に切断しても死ぬことはない。

となれば、脳をつぶすのが手つとり早い。もちろん、脳の位置は検索すみだ。
「ミミズの王、よ、覚悟はいいか？」

イシュトは悠然と問いかけると、真上にむかって跳躍した。

粘膜に激突する寸前、右の拳(こぶし)を突き上げる。

鈍い感触と同時に、視界がクリアになつた。イシュトの全身は、キングワームの粘膜を突き破り、内臓らしき物体を破壊し、肉も貫通し、そして最後に環節の隙間を縫うようにして外殻を破り、外に飛びだしたのだった。

その勢いは留まるところを知らず、いまやイシュトの身は空中にあつた。

街がミニチュアのように小さく見える。

空は青く、澄みわたつていて。突然、空に投げだされたような感じがした。

イシュトは降下しつつ、王都を一望した。

「ははっ！ 良い眺めだ！」

喝采をあげながら、穴ぼこだらけの演習場に着地する。

軽い衝撃に襲われたが、身体に異常はない。

常人であれば、地面に激突して即死していただろうに、なんともない。

イシュートが宙を舞っている間、ずっと硬直していたキングワームは、やがて地響きとともに転がった。自分が死んでいることを、ようやく思い出したかのようだつた。

イシュートの一撃は、キングワームの脳を見事に破碎したのである。

「ミミズの王 よ、安らかに眠れ」

イシュートは毅然として告げると、きびすを返そうとしたが——さて、これからどうすればよいのか、まごついてしまつた。

「そういうえ……まだ講習の途中だつたな」

遙まきながら、市街地には警鐘がけたたましく鳴り響き、災害の発生を住民に知らせている。本来ならば、兵士あるいは冒険者が一丸となつて当たるべき任務を、イシュートはたつた一人で片づけてしまつた。しかも使つたのは石ころと拳だけだつた。

と、そこに物々しい装備に身を固めた冒険者たちが殺到した。

「モンスターはどこだ!?」

「キングワームが出たと聞いたが?」

「おい、あれって……キングワームの死骸じやないか?」

勇躍して駆けつけたというのに、冒険者の一同は面食らつた様子である。

そのとき、イシュートの前に、例の鬼教官が駆けつけてきた。

「おいつ、そこの受講生! 待つてくれ!」

まさしく鬼の形相で、教官はイシュートを睨みつけている。

「……なんだ?」

イシュートが面倒くさそうに応じると、突然、教官は破顔した。

「見事な戦いぶりでありました! お名前をうかがつても、よろしいでしょうか?」

イシュートは面食らつた。

「イシュート殿ですな! 素手でキングワームを倒すなど、前代未聞ですぞ! それに、あの投石! あれほど見事な投石は、いまだかつて見たことがありませんね!」

教官は満面の笑みを浮かべている。先ほどまでの厳格さはどこへやら、鬼の表情は霧散して、

「……イシュートだ」

「イシュート殿ですな! 素手でキングワームを倒すなど、前代未聞ですぞ! それに、あの投石!

教官は感涙さえ浮かべて、イシュートの手を握りしめた。いかつい壯年男に手を握られて喜ぶ

ような趣味はないので、イシュートはさっさと帰宅したい衝動に駆られてしまつた。

と、教官の声を聞きつけ、冒険者たちや受講生たち、さらには養成校の職員や、往来の野次馬たちまでが、ぞろぞろと集まつてきた。

「皆の者、聞くがよい！」

と、教官が得意げに宣言した。

「すべては、こちらの少年——イシュト殿の手柄なのだ！　まだ冒險者の資格すら得ていなかつた少年が、たつた一人でレッドワームの群れとキングワームを討伐したのである！」

たちまち、その情報は周囲に伝播して、イシュトは注目的となつた。

「なんなのだ、この状況は……」

イシュトとしては、軽い運動のつもりだったのだが。

——大体、こいつらはなにを喜んでいるのだ？　俺に手柄を横取りされたわけだから、むしろ、この場で俺を倒して、手柄を横取りしたいと考えるのが普通ではないのか？　チヨロいというか、なんというか、よっぽど能天気なお国柄らしいな……。いや、待てよ。もしかしたら、俺を油断させるために演技をしているのか？　だとすれば、侮れん。警戒しておかねば……。

そんなことを思いつつ、イシュトは称賛の嵐を浴びつづけた。

「よくやつた！　ありがとう！」

「大型新人の誕生だ！」

「イシュト殿の伝説は、ここから始まるのだっ！」

拍手喝采は、なかなか終わりそうにはない。

いつしかヒーロー・インタビューが始まり、握手会へと移行し、ついには胴上げしようとう流れになつたが、

「ええい、やめんか！」

イシュトが頑として断つたので、胴上げだけは未遂に終わつた。

5

一騒動を終えたのち、イシュトは鬼教官——いや、もはや軟化したので、ただ禿げているだけの教官に連れられて、校長室にむかつた。校長からも称賛の嵐を浴びるのだろうか。

いや、あるいは……イシュトの投石で演習場は壊滅的な打撃を受け、もはや見る影もないのである。弁償しろといわれても、反論の余地はない。

だが、魔王時代ならいざ知らず、いまのイシュトに払いきれるはずもない。そもそも個人でどうにかできる金額ではないだろう。

「校長！　例の少年を連れてきましたぞ！」

「おおつ、お待ちしていました！　さあさあ、お入りください！」

扉ごしに返事があつたので、教官は勢いよく扉を開き、イシュトをいざなつた。
イシュトを出迎えたのは、白髪の老人だつた。ちんまりとした、いかにも好々爺といつた雰
囲気をまつてゐる。ローブを着用しているところを見ると、魔道士らしい。

「私が当校の校長です。遠慮せず、そこに掛けください。
イシュトはしかたなく、椅子に掛けた。

「貴公のご活躍は、すでに報告を受けております」

「うむ。それで？」

「貴公ほどの実力があれば、どこの国の軍隊であろうと、大喜びで受け容れるでしょうに……
それでも、あえて冒險者になるべく、当校に入学された。そうですね？」

「いや、まあ……なんというか、成り行きでな」

「謙遜する必要はありません。正直な話、もはや当校では、あなたほどの猛者もさに教えること
はなにもない——というのが、私が出した結論です」

「なんだ。つまりは、退学か」

イシュトは安堵あんどした。

これで冒險者にはならずにするむぞ、と思つたのも束の間、

「いえいえ、卒業です」

「卒業だと？」

イシュトは眉根を寄せた。

「待て待て。最短でも、受講期間は三ヶ月だと聞いているが？」

「ええ。ですが、貴公と他の受講生たちとでは、あまりにも能力差がありすぎて……大人しい
羊が群れている草原に、血に飢えたドラゴンを解き放つようなものです。おつと、この喻たと
えは失礼でしたな。とにかく、貴公と他の受講生とでは、まったく釣り合いがとれません。とい
うわけで——」

校長は席を立つと、こちらに歩み寄つてきた。そして、イシュトの手をギュッと握り締めた。

「ご卒業、おめでとうござります。貴公に軍神レイオスの御加護があらんことを」

「本氣でいつているのか……？」

……というわけで、イシュトは王立冒險者養成校を卒業した。
入学したその日のうちに卒業するという、前代未聞の記録を残して——。

QUEST 4 「こちらが、イシュトさんの冒険者証になります」

1

王都アリオスの繁華街は不夜城として知られ、一晩中、街の灯りが絶えることはない。魔法の力で輝く常夜灯が、たっぷり稼いだ冒険者たちを次々と迎え入れる。劇場、料理店、酒場、賭博場、高級旅館、そして娼館……今夜も、街は大いに賑わっていた。

そんな華やかな大通りからは遠く離れた路地裏に、小さな店がある。店名は〈妖精の隠れ家〉。

知る人ぞ知る店であり、看板の類は掲げられていないので、それなりに遊び慣れた者であっても、まず知らないだろう。老朽化した安宿の地下にある、小さな食堂だ。客席といえば、三人掛けのカウンター席と、テーブル席が一つ用意されているだけだった。カウンターのむこうに立つ店主は小人族の老人であり、ほとんど喋らない。

夜の九時頃、この店を団体客が訪れた。

先頭は、オルタンシア・レメイ・ベルダライン。狐系の獣人族であり、冒険者ギルドの王都支部長を務めている女傑だ。

つづいて、王都で評判の冒険者パーティー「銀狼騎士団」の全メンバー——アイリス、ランツエ、ルテッサ、魔女ゲルダ、そして聖獣クルルが扉をくぐった。

ベルダラインとゲルダとアイリスがカウンター席に、残る三人はテーブル席に着いた。そして、クルルは床にごろりと寝そべった。この店はベルダライン支部長のお気に入りであり、他人に聞かれたたくない話をするときは、決まって利用するのだ。

今宵もまた、秘密の会合が始まる。

「いやー。愉快愉快。冒険者ギルドはイシュト君の噂で持ちきりだよ」

蒸留酒をゲイツと呼ぶや、ベルダラインが笑つた。

すでに、ほろ酔い気分の彼女は、エキゾチックな着物の帯をゆるめている。生地の内側にこもつた熱気を追いだすように、真っ白な撫で肩を露出させていた。「支部長。いくら馴染みの店とはいえ、だらけすぎでは……？」カウンター席の中央に着いたアイリスが、半眼で注意するも、

この店はベルダライン支部長のお気に入りであり、他人に聞かれたたくない話をするときは、決まって利用するのだ。

この店はベルダライン支部長のお気に入りであり、他人に聞かれたたくない話をするときは、決まって利用するのだ。

「いいじやないか、アイリス嬢。どうせ僕たち以外に客はないんだしね！」

ベルダラインは一笑に付した。

「その牝狐めいこに人並みの倫理を求めても無駄ですよ、アイリス。非常識と破廉恥はれんちが服を着て歩いているような女ですか？」

「くうー！ 相変わらず、ゲルダの言葉責めは辛辣しんらつだなあ。でも、そこがいい！」

「そつちは相変わらず、変態ですね」

「最高の褒め言葉だよ！」

「……ところで、支部長。そろそろ、例の物を見せてほしいんだけど」

「ここらへんで軌道修正しておかないと、いつまで経つても本題に入れないと悟ったアイリスは、強引に話題を変えた。

「ふふふ。目の玉が飛びでるほどおどろくと思うよ」

ベルダラインは微笑をこぼすと、豊かな胸の谷間に指をつつこんだ。そして、細く巻いた羊皮紙ようひを取りだした。

今日の昼間、王都アリオスの市街地に、警鐘がけたたましく鳴り響いた。

そのとき、アイリスは私事に追われていた。

午後に予定されている『昼食会』に出席する間際まぎわだつたのだ。

冒險者としての癖くせで、アイリスは腰を浮かした。が、いつも手元に置いてあるはずの愛剣は、専属騎士のランツエに預けていた——。

やむを得ず、アイリスは予定通り『昼食会』に参加した。参加者たちは、「街中で火災でも発生したのかしら?」などと噂していた。

あの警鐘の原因が、実は火災などではなく、ワーム系モンスターの大量発生だったと聞いたのは、活動拠点としている宿酒場しゆしゅばに帰ってきた直後である。

冒險者たちの間では、昼間の事件の話題で持ちきりだった。

アイリスは悔いた。

市内にモンスターが侵入するなど、非常事態もいいところだ。あの『昼食会』さえなければ、アイリスも現場に駆けつけていたはずだったのに……。

だが、よくよく話を聞いてみると、意外な事実が判明した。
なんでも、たつた一人の少年が、百匹以上のレッドワームと、一匹のキングワームを瞬殺しゆげつしてしまったのだという。

しかも、その少年は冒險者の養成校に入学したばかりだったらしい。

その話を聞いたとたん、アイリスは直感した。

——イシュトだ、と。

があるので、〈妖精の隠れ家〉に来てほしいという。
そして、現在に至る——。

ベルダライン支部長が見せてくれた羊皮紙には、「冒險者イシュト」のステータス情報が記録されていた。

冒險者を志す者は、なにをおいても王立冒險者養成校を卒業せねばならない。

晴れて卒業すると、まずはギルドで各種検査を受けることになる。魔法の力で、冒險者としての各種能力値を解析されるのだ。

こうした数値化に批判的な意見もあるが、その一方で、冒險者の死亡率が格段に減ったのも事実だった。

「いやー、傑作だったよ！ なんせ、入学するために出かけていったはずのイシュト君が、その日のうちに、卒業証書を持って帰ってきたんだからね。前代未聞さ！」

アイリスとゲルダがイシュトのステータス情報を確認している間にも、ベルダラインは陽気に喋り続けている。

「王立冒險者養成校の歴史において、最短で卒業したのはアイリス姫だったよねえ。たしか一ヶ月くらいだったかな？ もつとも、当時の君は十歳のお子様だったから、単純に比較するわけにはいかないけど」

そのとき、ゲルダが紙面から顔をあげた。

「……信じられません」

表面的にはわかりづらいが、その横顔からは動搖が感じとれる。

「うん。これは異常だね」

アイリスも同意する。

そんな二人の反応を見て、ベルダラインはやりとした。

「いやー、笑っちゃうよね。まずは冒險者レベルを見てごらんよ」

「レベル0……？ こんなのが、見たことも聞いたこともない」

アイリスは呆然としている。

「通常、冒險者レベルは1からスタートするはずです。解析魔道士のミスという可能性は考えられませんか？」

と、ゲルダが慎重な意見を述べた。

「僕もね、最初はミスを疑つたんだけど、解析魔法に問題はなかつたそーや。イシュト君のレベルは、たしかに0だという。それがなにを意味するのかは、僕にもわからない。現時点での判明しているのは、彼の全能力値が上限に達していることくらいかな」

「じゃあ、彼の実質的なレベルは……？」

アイリスが尋ねると、ベルダラインは肩をくぐめてみせた。

「想像もつかないね」

レベルとは、冒險者の大まかな実力を推し量るのに便利なバラメータだ。冒險者ギルドが開発した解析魔法によって、新たに生まれた概念である。

レベル1から4までを初級冒險者と呼称する。

レベル5から9までが中級。

レベル10を超えると上級と見なされる。

冒險者の大半は、レベル6から8あたりで年齢的な限界を悟り、やむなく引退する。そのため、上級冒險者は稀少な存在であり、敬意をこめて「一桁」と呼称されることもある。それでも、イシュトのステータス表ときたら……レベルの他にも、おかしな点が多くあつた。

「このスキル欄はなに？ これも明らかに変だよ」

と、アイリスは指摘した。

「あー。文字化けしちゃってるね。獲得すみのスキルが多すぎて、解析しきれなかつたんだろうさ。どんなスキルを使えるのかは、本人を地道に觀察するしかなさそうだね」「アラインメントの数値にしても、異常です」と、今度はゲルダが指摘する。

「そうそう！ 一番の傑作はそれだよね！ 清々しいくらいに、彼はカオス・サイドの住人

だよ！」

ベルダラインは大笑いすると、ぐいっと蒸留酒を呷った。

「ふはーっ！ どんな悪人であろうとも、少しは秩序の要素を有しているものさ。かれこれ數百年の間、僕だつていろんな連中を見てきたけどね。どんなに極悪非道な奴でも、混沌の値は75くらいかな？」

「まあ、そんなものですね」と、ゲルダがうなずいた。

「歴史上、もつとも有名な暴君ですら、80が闇の山だらうさ。ところが、だ。イシュト君ときたら、文句なしの百点満点！ いやー、長生きはしてみるもんだねえー！」

「そういう台詞を口にすると、本当の歳がバレるよ。」

アイリスが忠告するも、ベルダラインは聞いてもいなかつた。この支部長の実年齢については、アイリス自身、よく知らない。かつてはゲルダとパーティーを組んでいたという。

「まあ、アラインメントは極めて曖昧な概念だからね。カオスの数値が高いからといって、すぐさま悪につながるというわけでもない。過去、カオスの値が高かった人物が、英雄になつた例も少なくないしね。逆に、ロウの値が高かった者が悪の道に進んでしまつた例なんて、掃いて捨てるほどある」

「肯定します。数字は嘘をつきませんが、眞実とも限りません」

ゲルダが淡々とつぶやいた。

と、ベルダラインが悪戯っぽい微笑を浮かべつつ、アイリスを見た。

「そういえば、アイリス嬢が冒険者になった当時も、おどろかされたよね。君は君で、アライメントがロウ・サイドに振りきっている。頼もしいような、危なつかしいような」

「そんなことをいわれても、自分ではよくわからないし」

そう、アライメントに関していえば、アイリスも極端なのである。

——わたしとイシュトは、正反対……？

それがなにを意味するのか、アイリスにはわからない。

「だからこそ、ゲルダが見ているのです」

と、ゲルダがきっぱりと断言した。

こういうとき、魔女ゲルダは決まって、アイリスの保護者のような顔をする。

見た目は十歳の女の子にしか見えないが、その瞳は深い。地獄の底まで見透かすような瞳だつた。アイリス自身、ゲルダの実年齢は聞かされていないが……噂では三百歳以上ともいわれている。

「そういえば、例の特別遠征についてだけど。報告書を読ませてもらつたよ。危うくアイリス嬢も死にかけたそうじゃないか。一体、ゲルダはなにをしていたんだい？ 君が本気を出して

「それでは、アイリスの成長につながりませんから」
真横でアイリスが聞いているにもかかわらず、ゲルダは淡々と答えた。

「さすがは魔女ゲルダだね。食えない女さ」といつて、ベルダラインがけらけらと笑う。

「食えないのは、お互い様です」

ゲルダはブイッと横をむいてしまつた。

「それはともかく、イシュト君を野放しにしておくわけにはいかないな」と、ベルダラインが鋭い目をした。

「そこは同意します」

ゲルダはうなずくと、懐から一冊の本を取りだした。表紙はボロボロで、紙はすっかり黄ばんでいる。いかにも古文書といった趣だ。

「……これは？」

ベルダラインがふしぎそつにつぶやくと、その本を手に取つた。アイリスにとつても、初めて見る書物だった。

「魔女ブリガンの予言書です。写本ですが」

「ブリガンといえば、君のライバルじゃないか。百年以上、いがみ合っていたよね」「むこうがベルダを一方的に敵視していただけです。迷惑千万でした」

「たしか、数年前に亡くなつたと聞いたけど?」

「寿命でしょう。それより、十三頁^{（トトロ）}を開いてくれますか?」

「ベルダラインは興味津々の顔をして、文面に目を通しました。

アリスも横から覗きこみ、文章を読み取つた。

大陸暦九九九年 暗黒神バルバロッサが統べる月

紅き月が真円を描くとき 世界の門が開きて

天より 『恐怖の大魔王』が舞い降りる

「大陸暦九九九年……今年じゃないか」

と、ベルダラインが鋭い目をした。

「暗黒神バルバロッサが統べる月というのは、閏月のことだよね?」

アリスが指摘すると、ベルダはうなずいた。

「ですね。今年は、宫廷占星術師が四月を二回繰り返すと決めましたから」

「イシュト君が発見された夜といえば、真っ赤な満月が輝いていたんだつけ。これについても、

びたりと符合するね。おどろいたなあ」

「そういえば、あの紅い月はなんだつたの? わたしは初めて見たけど」

いまさらながら、アリスが疑問に思つて尋ねると、

「残念ながら、原理は判明していません。ですが、過去にも同じような現象は記録されていま

すので、自然現象の一種でしよう」

ベルダは教師のように解説してくれた。

「ははっ! 魔女ブリガンの占いが当たつていいなら、イシュト君は『恐怖の大魔王』になつ

てしまふというわけか。まるでお伽噺^{（おとぎばなし）}だなあ!」

ベルダラインは愉快そうに笑つた。

「そういえば……イシュト自身が、自分を『魔王』だといつてたよね」

アリスが指摘すると、ベルダラインは微苦笑を浮かべた。

「さすがに、あの供述を鵜呑みにするわけにはいかないよねえ。まるで十代の少年に特有の冒

想みたいというか」「でも、嘘はついてなかつたんだよね?」

アリスが念を押すように確認すると、ベルダラインはうなずいた。

「ああ。知つての通り、あの天秤^{（てんびん）}は聖遺物の一種でね。どんな嘘も見抜くことができる。少なくとも、イシュト君は本気で自分が魔王だと信じこんでいる。まあ、僕も永年、いろんな冒

「それ見てきたけど……」風変わった人物なのは間違いない

「だね……」

「それにしても、珍しいこともあるもんだ」と、ベルグラインが意味深な笑みを浮かべつつ、アイリスの顔を覗きこんだ。間髪を容れず、ペロリと舌を出す。百戦錬磨のアイリスですら、これには虚を衝かれた。

頬をペロリと舐めあげられた瞬間、背筋が凍りつく思いがした。

「なつ、なにをするの？」

腰を浮かしたアイリスを愉悦しげに眺めつつ、

「アイリス嬢が特定の男子に興味を抱くなんて、一度もなかつたことだろ？」

と、ベルグラインは指摘した。

「べつに、深い意味はないよ。ただ、イシュトの強さには、どうしようもなく惹かれている……と思う。わたしもイシュトのようになりたいっていうか。彼が拳の一撃でベルグントを倒したとき——心が震えたの」

自分でも把握しきれていない気持ちを、アイリスがたどたどしく伝えた直後、

「アイリス様っ！」

鋭い呼び声とともに、ガタン！ と騒音が鳴つた。テーブル席のランツエが立ちあがつた拍子に、椅子を倒したのだつた。

「お立場をわきまえてください！ どこの馬の骨ともわかる男に興味を抱くなど、貴女にお仕えする騎士として、見すごすわけにはまいりませんよ！」

「だから、そういう意味じゃなくて……」

困惑するアイリス。

と、パクパクと料理を頬ばつていたルテッサが、助け船を出してくれた。

「ランツエ、少しは落ち着きや。あんたが絡むと、話がややこしゅうなるやろ。ほれ、このローストチキン、絶品やで！」

「ルテッサ、お前は黙つてろ！」

「はあ……ランツエの過保護つぶりにも困ったもんやな。そもそも、アイリスちゃんかて年頃の女の子なんや。恋の一つや二つ、あつてもええんとちやうんか？ 冒險のことしか頭になかつたアイリスちゃんが、生まれて初めて男に興味を持つたんや。うちらとしては、むしろ祝福すべきやと思うけどなあ？」

「お前がいうか！ 色気よりも食い気が勝つていてるお前が！」

「なんやでランツエ！ うちが本気を出したら、男の一人や二人——」

「はつ！ そんな幼児体型で、よくいう！」

「そういうあんたは、せつかくエロい身体しとるくせに、男日照りやないか！ 宝の持ち腐れやで！」

といつて、ルテッサはランツェの乳房を無造作につかんだ。

「きやあああっ！ なつ、なにをするのだ!?」

「あれつ？ 意外に、かわええ反応やな？」

「うつ、うるさい！ とにかく、わたしはアイリス様にお仕えする身だ！ この身も心も、アイリス様に捧げ尽くしている！ 男など不要だつ！」

ランツェとルテッサの口論を苦笑まじりに眺めつつ、ベルダラインが口を開いた。

「ま、海千山千の魔女(の)が遺した予言なんてものは、話半分に聞いておかないとね。魔女なんでものは、なんの根拠もない戯言(ぎげん)を、いかにも本当らしく飾りつけるのが得意な生き物なんだからさ」

「……もう。あんなのと一緒にされるのは、迷惑です」

「おつと、ゲルダも魔女だつたね。これは失敬！ とりあえず、魔女ブリガンの予言は念頭に置いておくよ。なにかの手がかりになるかもしれないからね」

といって、ベルダラインは古文書をゲルダに返却した。

「ところでさ。君たちに、相談があるんだけど」

ついに来た——とアイリスは思った。

身構えた、といつてもいい。

過去の経験上、この支部長が持ちかけてきた相談事の大半は、ろくでもない内容ばかりだつ

たのである。

「君たち『銀狼騎士団』には、心から期待しているんだ。ロスヴァイセ『白騎士』のアイリス嬢、重槍騎士のランツェ、ハイエルフのルテッサ、聖獣クルル、そして——魔女ゲルダ。錚々たる顔ぶれだよ」

「おだてたつて、なにも出ないからね？」

と、アイリス。

「気をつけてください、アイリス。これは……ろくでもない相談の前ぶれです」

ゲルダも半眼になつてゐる。

「そこで、君たちに相談だ！ 君たちのパーティーに、イシュト君を加入させてはもらえないだろうか！ なんといっても、あれほどの実力者だ。人畜無害だと確信できるまでは、監視役が必要だろうと思うんだよね」

「支部長殿、申し訳ありません。その依頼には応じかねます！」

速攻で拒否したのは、ランツェだつた。ルテッサと口論していたはずなのに、いまやベルダラインに肉迫している。

「ど、どうしてだい、ランツェ？」

「銀狼騎士団は男子禁制です！ イシュヴァルト・アースレイの入団は絶対に認められません！ 万が一、アイリス様に変なムシがついたりしたら、どう責任を取るおつもりで!? わた

しの首はおろか、支部長殿の首も差しだしてもらうことになりますよ！」

「ちょっと、ランツエ。いくらなんでも、大袈裟すぎ——」

「アイリス様！　いまは、わたしと支部長殿が話しているのです！　口を挟まないでいただきたい！」

「アイリスは溜息をついた。長い付き合いなので、ランツエの性格は知悉している。こうなると、梃子でも動かせないだろう。

アイリス自身は、ベルダラインの提案に魅力を感じていたのだが……とても、いいだせる雰囲気ではなかつた。

「はあ……。相変わらずだなあ、ランツエは。ま、イシュト君への対応については、僕なりに考えてみるよ。とりあえず、明日の朝にはイシュト君の冒険者証が完成する。すべては、それからさ——」

さすがの支部長も、ランツエの石頭ぶりには降参を余儀なくされた。

その後は他愛のない雑談となり、夜も更けた頃、秘密の会合はお開きとなつた。

2

まばゆい朝陽がカーテンの隙間から射しこんで、イシュトの目蓋を刺激する。

「……もう朝か

ゆっくりと目を開く。

真っ先に視界に飛びこんできたのは、見慣れない天井だった。

薄汚れていて、片隅には蜘蛛の巣が張つており、見るからに貧相だ。魔王城の寝室とは比較にもならない。調度品といえは、簡易ベッドくらいである。

思わず「ここはどうだ!?」と声をあげてしまつたが、すぐに思い出した。

ここは冒険者ギルド王都支部に隣接する、簡易宿泊施設である。

宿泊費はギルドが立て替えてくれた。いろいろと訳ありな連中を、ギルドが一時的に保護するための施設らしい。

昨日、入学初日にして養成校を卒業してしまつたイシュトを出迎えたベルダライン支部長は、そこで冒険者ギルドが手配したのが、この宿屋だったのである。

事情を聞くなり、腹を抱えて笑つたものだ。その後、各種手続きをませさらには各種検査を受けていたら、日が暮れてしまった。

イシュトにとつて、こんな木賃宿に泊まるのは初めての経験だった。

隣室からは耳障りな鼾が聞こえてくるわ、隙間風はひゅうひゅうと吹きこんでくるわ、腐りかけた床板の上を正体不明の虫が這いまわっているわ、とても寝つけそうにないと思つて

いたが……昼間に運動したおかげか、あつさりと眠りに就いたのだった。
ベッドを抜けだすと、窓際に立つ。窓を開けて、濁んだ空気を追いだした。眼下の街並みを眺めると、今朝も様々な種族が行き交い、大いに賑わっている。

「平和な朝だ……前世とは大違いだな」

イシュトは思わず、感慨にふけってしまった。

王子時代、そして魔王時代を通じて、イシュトの日常生活は戦場ながらの様相を呈している

た。

なかでも筆舌に尽くしがたいのが——女難だった。
とかく魔族の女たちときたら、自己主張が強く、己の欲望に忠実で、あわよくばイシュトを籠絡してやろうと狙っていたのである。相手が魔王だからといって、畏れる様子は微塵もなかった。

イシュトの子胤を宿した宮廷女官の地位は、飛躍的に上昇する。

王妃の座も夢ではないし、たとえ愛妾であっても、将来は安泰である。

熾烈な競争であった。

彼女たちは、あの手この手でイシュトを籠絡すべく暗躍した。特に、イシュトにとんでもない淫夢を見せたがるサキュバス女官たちの攻撃には、辟易したものである。

「このまま三十歳の誕生日をお迎えになつたら、『妖精さん』になつてしまひますぞ！」
張り、節操のない宮廷女官を遠ざけることで、貞操を守り抜いたほどである。

見るに見かねた重臣たちは、

「このまま三十歳の誕生日をお迎えになつたら、『妖精さん』になつてしまひますぞ！」
と、口を酸っぱくして諭したもののだが、イシュトは「そんなものは迷信だ」と決めつけ、山に引きこもった修行僧のごとく、頑として女官たちの誘惑を拒んだ。

そうこうしているうちに、先代魔王が病死し、七十二名の兄弟姉妹による王位争奪戦が始まった。もはや色恋沙汰どころではなくたった……。

王位争奪戦を制したイシュトは、見事、王位に就いた。

折しも戦時中だった。イシュトは棘腕を振るい、魔王としての資質を存分に示した。
だが——即位して六六六日目。

三十歳の誕生日を目前に控えた、その日。

魔王城に潜入した勇者たちによつて、第二代魔王イシュトは討伐された——。

「……一度は死んだと思った。すべてが終わつたかと思った。だが違つた。むしろ俺の人生は、
これから始まるのかもしれない」

そうつぶやくと、イシュトは目の前で拳を握りしめた。

そのとき、扉が遠慮がちにノックされた。

「……イシュトさん。お目覚めでしようか？」

扉ごしに聞こえてきたのは、若い女の声だった。

敵意は感じられない。それでも、イシュトはサッと身構えた。

「だれだ!?」

「冒険者ギルドの者です」

「ギルドだと?」

イシュトは顔をしかめながらも、扉の鍵を開けた。掛け金を押しあげるだけの、簡素な仕組みだった。防犯という見地に立てば、最弱クラスであろう。もつとも、勇者たちの潜入を許した魔王城もまた、防犯体制はガバガバだったわけだが……。

「……入るがよい」

イシュトが声をかけると、扉が開いた。入ってきたのは、冒険者ギルドの制服に身を包んだ女だった。

「――！」

不覚にも、イシュトは彼女の美貌に目を奪われた。

ブロンドの髪を丁寧に結っており、清潔感がある。制服をきちんと着こなしているので、大人っぽい雰囲気を漂わせているが、その顔立ちには、まだ少女の面影があつた。

年の頃は十七、八だろうか。ほつそりとしているが、胸元は豊かで、否応なしにイシュトの目を引きつけた。

「おはようございます、イシュトさん」

女は礼儀正しく頭を下げると、自己紹介をした。

「わたくし、冒険者ギルド王都支部のエルシィ・ノワと申します。本日付けをもつて、イシュトさんの担当官を務めさせていただきます。普段は王都支部の受付にいますので、なにかご不明な点などありましたら、遠慮なく聞いてくださいね」

「待て。それは宫廷女官のようなものか?」

イシュトは警戒心を抱きつつ、尋ねた。

脳裡に宫廷女官たちの高笑いがこだまする。第一印象は折り目正しいが、この女も、もしかしたらイシュトの貞操を狙っているのかもしれない——。

「はい? なんのことだか、よくわかりませんが……」

エルシィは怪訝^{けげん}そうに首をかしげると、あつさりとスルーした。

「わたくしの任務は、イシュトさんの各種サポートです。イシュトさんは、いろんな意味で格外^{げくわ}といいますか、異例尽くしの大型新人さんですので、わたくしが責任を持つてサポートさせていただきます」

どうやら、宫廷女官とはタイプの異なる職種らしい。

イシュトは安堵したが、いよいよ「冒険者」という仕事が目の前に迫ってきた気がして、憂鬱になつた。

「冒険者か……」

「なにか、ご不安でも？」

「いや。本音をいえば、あまり気が進まんのではな」

「そうなんですか？」

エルシイは小首をかしげた。

「ですが、イシュトさんの情報は冒険者ギルドに登録すみでし、王立冒険者養成校の校長先生からは、熱烈な推薦状もいただいています。しかも、あの白騎士――アイリスフラウさんが、イシュトさんの後見人を買ってでられたんですよ。冒険者ギルドでも評判になつていますよ」

「ぐぬぬ……」

「そもそも、あれだけの戦闘力をお持ちなのに、冒険者にならないのはもつたいたないです。もちろん、正規の騎士団に入るという選択肢もあります。アイリスフラウさんの推薦状があれば、審査は余裕でパスできるでしょう」

「軍隊組織に興味はないな。いや、ないこともないが、俺は軍隊に入る側ではなく、軍を動かす側なのだな」

「動かす？ つまり、将来的には軍師を希望ということでしょうか？」

「いや、そう意味では……」

「どうにも話が噛み合わない。」

「とにかく、イシュトさんは冒険者にむいていると思いますよ」

エルシイは完璧ともいえる笑みを浮かべた。

「……！」

その美しさに、イシュトは息を呑んでしまった。

良くも悪くも食欲で、己の欲望に忠実な魔族の女たちとは大違ひだ。

結局、その清楚な笑顔に釣りこまれたかのように、イシュトは承諾してしまった。

「いいだろう。一度決めたことだ、やってやる」

「その意気です。ところで……イシュトさん？」

と、エルシイが頬を赤らめながら、遠慮がちにいった。

「なんだ？」

「いい加減、服を着てもらえたと……ありがたいんですけど。その……自分のやり場に困るとい

りますか？」

「……!?」

自分の身体を見下ろすなり、イシュトは赤面してしまった。

下着一枚という、あられもない格好をしていたのだ。寝間着がなかったので、昨夜は半裸で床に就いたのである。

「さつ、先にいわんか！」

「すみません！ イシュトさんなりのジョークか、あるいは民族的な風習かとも考えられましたので、なかなかいいだしづらくて……」

エルシイは頬を赤らめている。

「もうよい。悪気がないのはわかつた」

イシュトは納得すると、エルシイの正面に立つた。

「ほら、早くしろ」

「はい？」

一瞬、エルシイはきょとんとしたが、やがて事情を納得したらしく、ハンガーに掛けてあった衣服を手に取つた。そして、イシュトに着せ始める。

やがて、イシュトは木綿の服の上下と、レザーシューズを身に着けた。

「うむ。大義であつた」

イシュトが大真面目にねぎらうと、なぜだかエルシイはくすりと微笑んだ。

「イシュトさんつて、意外に甘えん坊さんなんですね。ちょっと、びっくりです」

「ん？ どういうことだ？」

「

「今日は特別サービスということで、お手伝いしましたけど。次からは、ちゃんと自分でお着替えしないと——ダメだぞ？」

急にお姉さんぶつて、エルシイはイシュトの鼻先をつんと突ついた。

ここに至り、ようやくイシュトは失態を悟つた。

「うわああああっ！ 違う！ 違うぞエルシイ！ いまのは、その……つい昔の癖が出てしまつたのだ！ お前に甘えたかったわけではない！」

羞恥心が最高潮に達したイシュトは、ベッドにダイブした。頭から毛布を引っかかるつてしまふ。

「ふふふ。恥ずかしがるイシュトさんつて、とつても可愛いんですね」

「頼むから、忘れてくれ……」

前世では、常に召使いの手を借りながら替えをしたものだが、決してイシュトが望んだわけではない。魔王城では、そういう決まりだったのである。

もちろん異世界で生まれ変わった現在、自分一人で着替えねばならない。そんなことは百も承知だつたはずなのに——起き抜けにエルシイが顔を出したせいで、ついつい召使いのようになってしまった。

習慣とは恐ろしいものだと、イシュトは痛感した。

そもそも、エルシイだつて人が悪い。

そもそも、エルシイだつて人が悪い。

即座に拒否してくれればよかつたものを、悪乗りしすぎである。とはいえ、お姉さんぶつてイシュトの鼻先をついたエルシイには、新鮮な魅力があった。危うく、新たな性癖が目覚めるところだった……と、イシュトは思った。

3

その後、イシュトはエルシイに連れられて、冒險者ギルド王都支部を訪れた。
「こちらです、イシュトさん」

エルシイが案内したのは、一階フロアの大半を占める食堂だった。

席に着いているのは、冒險者ばかりである。年齢や性別、武装、そして種族もばらばらな者たちが、同じ食堂の飯を食べている。

この連中のなかから、いざれ勇者が誕生するのかもしれない……と思つと、いまのうちに倒してやろうかとも思つたが、さすがに自重する。

「とりあえず、座りましょうか」

エルシイの提案で、適当な空席に腰を下ろした。

フロアには珈琲の芳香が漂っている。

「…………」

イシュトは強烈な食欲を覚えた。だが、所持金がない。かといって、エルシイに「飯を食わせろ」と命じるのも、なんだか体裁が悪い。

「……いや、ちょっと待てよ？」

ふと、イシュトは眉をひそめた。

「エルシイ。聞きたいことがある」

「はい、なんでしょう？」

打てば響くように、エルシイは笑顔で応じた。

「俺はすでに、アース・ドラゴンの最上位種を一匹と、レッドワームを百匹以上、さらにはキングワームを一匹、討伐している。目撃証言もあるはずだ」

「はい、ギルドでも確認しています」

「その報酬は、ないのか？」

「あ、その件についてですが……」

エルシイは申し訳なさそうな顔をした。

「実は、イシュトさんがモンスターを討伐された時点では、まだ冒險者として正式に登録されていませんでしたので、報酬はお支払いできないんです。規則ですので……」

「融通が利きかんものだな」

イシュトは嘆息したが、かつて一国を統治していた身なので、事情は理解できた。国家だろ

うが民間組織だろうが、規律は重要である。

「ですが、ギルドの職員一同、イシュトさんのご活躍には心から感謝しています。イシュトさんが安定した収入を得られるようになるまで、生活面でのサポートは惜しませんので、困ったことがありましたら、なんでもお申しつけください。そういえば——朝ご飯、まだでしたよね？」

エルシィはにつこりすると、メニューを差し出した。

「どうぞ。お好きなものを、なんでも注文してくださいね」

「いつておくが、俺は無一文だぞ?」

「念のため、イシュトは確認した。

「もちろん、ギルドが受け持ちますので」

「うむ。それでは遠慮なく——」

イシュトはメニューを開くと、目を爛々と光らせた。

「ふう……こんなに食べたのは久しぶりのような気がする。美味であつたぞ」

イシュトは満腹を抱えつゝ、食後の珈琲を堪能していた。

目の前には、大量の皿を山のように積みあげている。

異世界で暮らすにおいて、食事が合わなければ一大事だと思っていたが、その心配はなきで

うだ。魔王城の料理も悪くはなかつたが、この世界の庶民料理のほうが、よほど美味いし、胃にも優しい。

それでも、ふしげだと思った。前世のイシュトは魔族の頂点に君臨する王であり、その地位にふさわしい巨軀を誇っていた。

そんな自分が、細身のヒューマンに生まれ変わったのだ。正確に測つたわけではないが、体重は三分の一ほどに減つたはずだ。となれば、食事量も大幅に減るべきだろう。

ところが、むしろ前世の自分よりも、いまの自分のほうが、食欲旺盛なのである。昨夜は木賃宿で質素な飯を食わされたので、その反動だろうか。

いや——だとしても、この食欲は異常だと思った。

ふと、エルシィの視線を感じた。

「どうかしたのか?」

「いえ。イシュトさんが食事をされている姿に、圧倒されてしまいまして……」

皮肉かとも思ったが、エルシィは本当に感嘆している様子だった。

「いや、なんというか……ひとたび食べ始めたら、止まらなくなつてしまつてな」

イシュトは赤面した。

「ふふふ。とっても気持ちいい食べっぷりでしたよ。男の人って感じがしました」

エルシィはにつこり笑うと、ずっと手元に置いていた書類を差し出した。

「なんだ、これは？」

「イシュトさんの基本情報です。誤記がありましたら、すぐに修正しますので、いますぐ確認をお願いできますか？」

「イシュトが食事をしている間、エルシイがずっと付き合ってくれた理由が、ようやく判明した。まだ仕事が残っていたらしい。」

「なんだ。食事中でも確認できたのだが」

「ものすごく熱心なご様子でしたので、声をかけるのは野暮かと思つたんです」

「そんな気遣いは無用だ」

イシュトはぶつきらぼうに返すと、書類の確認を始めた。

冒險者名	イシュト
本名	イシュヴァルト・アースレイ
生年月日	大陸暦九八一年 冥府の月（閏四月）十三日
年齢	十八歳
職業	見習騎士
出身地	レハール王国
パートナー	北部未開拓地域
未定	

……といった感じで、イシュトの基本情報がずらりと羅列されている。

「おい、エルシイ。この生年月日と年齢だが、明らかに誇称だぞ？」

イシュトが指摘すると、エルシイは苦笑はじりに答えた。

「その点につきましては、イシュトさんの過去に曖昧な点が多いので、ギルドのほうで便宜的に設定させていただきました。冒險者を目指すような人は、いろいろと複雑な事情を抱えている場合も多いので、珍しいことではないんですよ」

「ふむ、そういうわけか」

そもそも、イシュトの正式な生年月日を記述しようと思ったら、まずは前世における暦から説明しなければならない。「暗黒暦」などといわれたところで、この世界の人々は首をかしげてしまうだろう。

「嘘も方便というわけだな。まあ、よかろう。ところで、俺の出身地だが……」の北部未開拓地域というのは、なんのことだ？

「そちらにつきましても、素性を明かされたくない人や、出身地を知られたくない人が少なく述べませんので、便宜的に『北部未開拓地域』としてあるんです。あまり深い意味はありませんので、お気になさらず。ちなみに、イシュトさんが保護されたバルディオス神殿塔が建っているあたりが、まさしく北部未開拓地域となります」

「ならば、あながち嘘というわけでもないな」
イシュトが降臨した地点が「北部未開拓地域」に含まれるというのなら、ある意味、出身地といえなくもないだろう。イシュトは納得した。

二枚目は身体測定の結果で、主に身長や体重などのデータが記録されている。

三枚目に差しかかったとき、イシュトはびくとりと眉を反応させた。

冒險者レベル、体力や魔力、攻撃力や防御力……等々、物差しでは測れないような要素までが、いちいち数値化されているのだ。運だのアラインメントだのといった、曖昧な要素も例外ではない。

余計なお世話だな……と思ったイシュトは、ふと違和感を覚えた。

「おい、エルシー。お前たちの世界では物を数えるとき、いちいち0から数えるのか？」

「いえ、普通は1から始めますけど」

「ならば、どうして俺の冒險者レベルは0になっている？ 1なら理解できるが」

エルシーは苦笑した。

「実は、当ギルドでも話題になっていたのですが……レベル0という解析結果は前代未聞なんです。ちなみに、イシュトさんの各能力値は、すべて上限に達しています」

「それはもう、伸び代がないということか？」

イシュトは眉をひそめた。

「いえ。それ以上は解析できないという、魔道士側の問題です。今後、イシュトさんが成長できぬ——というわけではないと思います」

「ふむ。ある程度の強さを超えると、測定不能になるというだけか。それなら問題はないが……ところで、このスキル欄はなんだ？ 文字がまったく読み取れんぞ」

エルシーは再び苦笑した。

「イシュトさんの場合、身に着けているスキルが多すぎたり、意味不明だったりで、文字情報として上手く表現できなかつたようです。これまた前代未聞だそうですよ」

「そうか……まあいい。俺自身にどんなスキルがそなわっているのか、自分で調べてみるのも一興だ」

イシュトは会心の笑みを浮かべると、書類から顔を上げた。

「うむ、すべて確認した。これで問題ないぞ」

「ありがとうございます」

エルシーはにつこり笑うと、書類を受け取った。

そして、今度はカードのようなものを差しだした。

「なんだ、それは？」

「こちらが、イシュトさんの冒險者証になります」

「ふむ……」

イシュトは冒険者証を手に取った。表面には魔法陣のような紋様が、裏面にはイシュトの名前と番号、そして冒険者ギルドの紋章が刻まれている。

「ふしぎな材質だな。紙のように薄いくせに、石や金属のようになに頑丈だ」

「素材はアーメタルの一種です。ちょっとやそとの衝撃で壊れることはありますんから、ご安心ください。それと、このカードにはイシュトさんの情報が記録されています。イシュトさんの成長に合わせて、情報も更新されていく仕組みになっています。いわば、魔導具の一種ですね」

「ほう、大したものだな」

イシュトは感心した。やはり魔法文明に限つていえば、この異世界のほうが、前世よりも一段に進んでいるようだ。

かくして、イシュトは冒険者証を受領した。

前代未聞——レベル0の新米冒険者が誕生した瞬間であつた。

それがなにを意味するのかは、まだ誰も知らない……。



『レベル0の魔王様、異世界で冒険者を始めます 史上最強の新人が誕生しました』の

試読版はここまでです。

お読みいただきましてありがとうございました。

続きは8月10日頃発売の製品版でお楽しみください！

※この試読版は製作中のものであり、製品版と一部異なる場合があります。